源氏目案 上

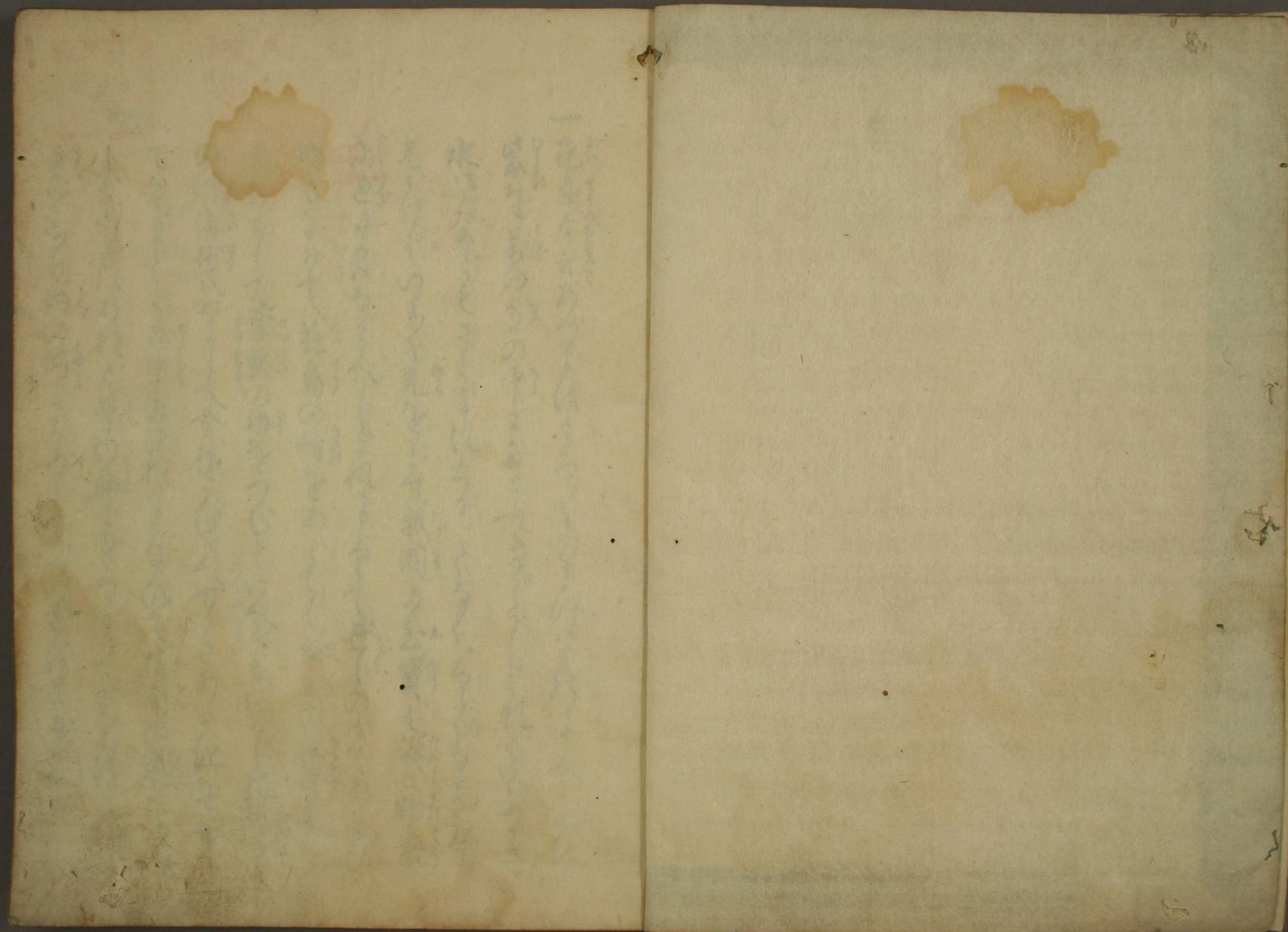
いちまて

12
20
49

源氏目案 上

いちのそ

利
20
3



特別
門 20
號
巻 349

一花島序文あづまぶみもろくのうめいはまちうへこをれ
紫を筆の色の中まるぬらるごとしこれまことあつき
氷いろあどをさしよせたるくくとるさ聖
見ぐけどいつく光をます我國の玉寶も源氏物語
はるさきはるべしこれまことにてせくのまてあそび
地とるりて花島の情をあくまくの注釋まちち
まちまして雪螢の功をつむとりへどもいぐしけおとぐ
の河海抄ハつくへ今をくむぐへがきあくれをまつ
てをもとくもれ中のはれまるるのて指南の道をえ
くくまれど筆の海まをちどりておくれまれる
奥をまち河の材まづてくいぐれまもち兎ゐへ

そのかたはひろひあやまちおほくをはハ先達の
おしざるをむかざれバ後生のことをかんぞあるべし
ざらんやつねに愚眼のをよぶ所筆舌にのべて愚筆
餘情となづくるところあるなり
一宇治の大納言物語云今ハむかし越前守為時とてさえ
せおめでたくやさしかりける人ハむらさき式部がおやなり
この為時源氏ハいかゞあるかしとかゝるらんしをも
ともかくよませたりけるとぞされいの文このことは
守ちそでむかしあめしいたしたりけるけ此源氏ほうかを
するといはゞそのつまへよわくつるそのうつくる
うちとものすうれかまつとあらん

一後鳥羽院御記建久二年一切物語雖多或有虚或詐佞曾物
語ハ詞指事あるけれども上手あめでたき詞辞勝也大和ハ無下
ヵ芳其外無何物語盡もふ覚無其詮之者也源氏物語ハ
不可説物也更非俗人之所為紫式部書之始一條院有勅
諚不可説物也或ハ日本記とさへあらハれたれと
ら仰于時左清少納言侍婚比論言号日本記御局云〻誠
諸道諸藝皆籠此一篇不可説未曾有下說源氏哥ハ
芳也狹衣哥こそ餘りれと云人あると云此条心淺猿
事也更非同日論議狹衣哥もおほく不悪ハあれども源氏
哥ハ不可及事雲泥也凡哥道ハ知与不知水火者也源氏
ハ第一の詞つゞき於人ちから不可説事也第二哥秀

歟。是又何人及之乎。三作者也。以虚玄畫優美為之事
もるべし。但未見哥又不才説也。但是ハ我朝究上也。
詞ハ更非凡人之所為物也。未知子細之輩不可弁是非。凡
古今後撰為大意。時ハ則一条院比とかや。[illegible]
通物歟
一河海序云。光源氏ハ寛弘一条院のはじめに出きて。康和堀河院の末にひろまりけるを略之
一同抄に云。これもれいのおこりの説をあげたれども。
西宮左大臣。安和二年太宰権帥に左遷せられ給しかば。
式部おさなくよりなれたてまつりて。思ひなげきけるか
比。大斎院選子内親王村上女十宮より上東門院へめづらかなる草子
やさぶらふと尋申させ給けるに。うつほ竹とりやうの
の古物語はめなれたれば。あたらしくつくりいだして
たてまつるべきよし式部に仰られければ。石山寺
に通夜して此事をいのり申に。おりしも八月十
五夜の月。湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語の風
情空にうかびけるを。わすれぬさきにとて。仏前に
ありける大般若の料紙を本尊に申うけて。まづすま
あかしの両巻をかきとゞめけり。是によりてすまの巻
にこよひは十五夜なりけりとおぼし出てとは侍るとかや。
後に罪障懺悔のために。般若一部六百巻をみづから
かきて奉納しける。いまに彼寺にありといふ。光源氏を

左大臣よりそゝくに紫上紫式部が身よりそへて閑云
且白居易の古風ゆんゝくに左納云菅丞相のゝうゝを引
てゝさゝ出しけるべし其のち次第に書加て十
四拍よりて式部大納云行成より清書
きさゝられて象院へまいらせられけるに法成寺入道
開白奥書を加られて云式物語世間式部が作とのゝ
光此丘等を加るとゝろもとゝ誠に君臣の交仁義乃
乃好色の媒菩提の縁まいらまで是をのずゝ
ゝとる其をもむき荘子の寓言におるゝさまに
詞の妖艶さゝる此類ゝ一部の中に紫上の事をと
られてゝさいでゝるおよ式部の名をあゝゝめて紫

式部と号きゝれゝゝ一説云式部の名逝去ゝゝ
ゝて後に紫のゝれのゝのゆゝに紫の字にゝゝゝ
ゝゝゝと云或説云一条院のれめれとこのゝも上東門院
へまいらせゝゝて我ゆゝのれゝるおゝれとも
名とゝさせ給けるに式部と名あり武蔵守
藤原ゝとゝもいへり

一物語の時代は醍醐朱雀村上三代に准ずる歟桐壺門帝
延喜朱雀院は天慶冷泉院は天暦光源氏は西宮左大臣
此ひわ尚するも

一顕宣公の母は寛平法皇の皇女延喜の帝の御妹也後仕大
臣の母も桐壺門の御腹とあり此外甚僻ゝ雖者

云へ前の准授誠よりせあらといへども此抽評は光源氏
をむれとすは狭されば西京左大臣よ准ずること一世の
源氏左遷の説はわ同しくられども皮玄好色の先達とハ
さらてこそこそ今の抽評は殊よい道をおう
う狭若曰はそうもれぐうのるるい大綱い其人乃
おもうげあれども行説をきてもおるべ地よくく
まかれを摸することるる漢朝の書籍春秋史記か
ごいよ実録ともかく有ニ美風歟

一桐壺帝冷泉院を延喜天暦よるずくへなるべく或を
唐の玄宗のるれるるるるるの事或ハ崇始皇のくれ
うう例をうつきう又天慶れ門ハ相續の皇統おりしまき

れどもいもれぐうるるは冷泉院のれ子今上冷泉院の
れ後ちすし（武流曰此条有ニ作者意趣歟云々）光源氏をも安和の左府よれそと
いへども好色のるるハ道の先達ちうゆへよ左中将の
風をまねびて五條二条の后を藤雲の女院勝月和の
尚侍ようそへ或いるるのかが将のそうをおもへうう又
太上天皇の号も漢家よりは若公の旧躅本朝よりは若
壁王子ホ先蹤を摸ちう狭是作物語の習ぜうじめよ
いづれのれ時よりて分明よ書あるいはさぐ家もれ敷也
色去下よは延喜のれ例と云心をあくめりれ外或を
桓武一条院を桐壺れ門よ准じ又内大臣伊周公を光源
氏よ擬ちるといよ一説ともる狭皆以謬説也若桓武

とつくり其いご後の帝王陽成宇多延喜の代名物語ゑ
あり一条院ゑ後代の事ゑしぞ其
上次ぎ巻ゑ代上ばよすめ千枝つれのゑとゑ
人業雅村ゑのれ世れ書士也代ゑ云ゑ一条院まで
生ゑず又絵合の巻ゑ業雅院ゑ者代の由載之無美論年
一代物語代本一やうゑ巻ゑ絵源氏行成卿自筆の本も悪今世
ゑ伝ゑ後源光行い八本ゑ也て接合取捨ゑて家本ゑせ
ゑ所謂二条帥伊房本冷泉中納言圓隆本堀河左大臣俊
房本号黄表紙左大臣冬嗣号黄表紙後一位藤子本土御門右大臣女号京極妃政子法性寺関白本唐紙小双子
ゑ条三位俊成本京極中納言定家本号青表紙等也各雖澄本皆
有異同扨勘合古本且可加ゑ見者耶善者後之京之義也

一黄表紙後代ゑ青表紙定家二条家用ゑ奥入汁ゑ云也
已違所為也ゑ為相母阿佛尼為氏継母也奥入ゑ河ゑ為
也或説奥入い伊行ゑ作也それゑ定家ゑ注ゑ加ゑ
一河内本河内寺大監物源光行八本ゑ以て接合取捨ゑて
家の本ゑすぼゑる

一紫式ゑ母常陸介藤原為信女 上東門院女房或鷹司殿女房

- 内舎人 勧修寺家祖
- 良門 閑院左大臣冬嗣五男
  - 利基 左中将
    - 兼浦 堤中納言
      - 惟正 刑部大輔 豊下総守
        - 為時 紫式ゑ
  - 高藤 勧修寺内大臣
    - 兼成 勧修寺内大臣
      - 女子

代式ゑ後ゑ右衛佐宣孝ゑ嫁して大貳三位弁局接衣
ゑ生ず但代ゑ西親町ゑ南京極西頬今東小院向也代

院は上東門院の御願也。文武天皇墓所也。雲林院・白毫院
南小野皇墓の西にあり

一源氏をうるはしをとぐべし。感者必裏の心を尋て見悪
き消て、好文のゝうるはしくばゝよりつゝ名は源氏をゝ紙
をゝひて見る

一九品十宇恬の巻名は宇の意あり。一は何をとり、二は
七寸を何とも名とも天台の教は四諦法門なり。
一は門、二は空門、三は亦有亦空門、四は非非
空門也。一切の玄教は此宇諦より出ぬ。これよりして故に
諦外別立法性とも天台の真實の道理は玄教の

二巻桐壺　何を名ともなるにより光源氏の母
桐壺は淑景舎也。此所曹司なるにより
御息所を桐壺更衣とも、仍巻の名とせり。一名壺
前栽。何にもまへのつぼせんざいの盛なるとあり

二の巻箒木　うゝを名ともなる
けゝぎの心をもつてその糸の道にはやるゝ心をひめられ

并一空蟬　蟬のゝ殼をへてげゝまれぬよれ人ゝ殼をけりうゝれ
巻の并のゝ心はうつゝかの抜殼なり。この并、春日祭又
賀茂吹上巻再勅使　演松のまがゝまも并

一帖あり。此の例狭元并の様一備に同時のごとく
もちゐず。横縦ともに元同じぐさ紙分るもの是を縦
并と云。空蟬の巻是なり。つゝが濱松は横也。末摘
も縦横おなじ事なり

并二夕顔 縦のみ也。并と詞を紙名とする事

心あてにそれかとぞみる白露の光そへたる夕がほの花

三 紫 并を名とする。若紫とつゞき多分詞いとゞ
多くつゝいたしもえん紫のねにかよひたるのべのわかくさ

并末摘 横縦のみ也。并を名とする事

ちるまつ花をたれかたをるこれ末摘花を袖にふれる事

四 紅葉賀 詞を名とする事

但し巻に紅葉賀とつゞきたれども詞はなしなし。巻のくんの巻に
紅葉賀とあり。故裏紅葉の巻にもこれあり

五 葵 詞を名とする事

南殿のさくらのえんを結ぶ。行事

六 賢 うるを名とする事

はうるやへのうぐひすあつひゆへ神のまつりに行けば

七 榊 并と云ことゝ紙名とする事

榊がえ花ちるゝ枝もなるゝ物といふまぎれつゝ事なれば

八 散星 うるを名とする事

花ぞ乃紙ちりゝ時鳥もれる星を見れば

九 次广 并と詞を名とする事

松もまたあまたなれども人の心をなぐさめ
十明石　哥ときこゆるかたを名ときこと
ちぎりつる明石の浦の秋霧のうちやどりをおもひやられ
十一澪標　うみ藻刈名ときこと
うら波たちてうらもとまでもめぐりあひてこえこみてか
并一業生　横のうしびせ哥と詞を名ときこと
引わけ舟もまぼろしといめみちまくかきうまれまくの心を
并二関屋　絵のうしびせ詞を名ときこと
関屋にうるさしばしくつづれ哥ときこと
十二澪合　詞を名ときこと
心琴の絵合と詞きこと詞をもるけきど・うけどうの

ゆきかれ・うつりのうしげをあらせすがらあり・秋
の月の・浦拾遺集の詞・正子内親王絵合の夏ときこと
十三雲風　哥と詞を名ときこと
月をうへて独人れる高きにきこと松うぐぞ
十四薄雲　哥を名ときこと
入日さす峯にたなびく薄雲ハいまはこの袖よりやまぢへ
十五槿　哥ときこと詞を名ときこと
うつりかはりなれぬ槿の花のさかりハすぐやすめ
十六少女　哥と詞を名ときこと
しをるも神さびぬ・てはの袖ゆるぎ世のさとりをひへあれば
十七玉鬘　哥を名ときこと

恋わたる身はそれなれど恋ごいるるすずらと詠○うあるん

并一初音 組のるゝびや・哥と詞と名ごきるる

手月を松よひられてゆる人よ鶯のそいゝ○こうせる

并二胡蝶 組のるゝびや・哥と詞と名ごきるる

恋ぞのゝこゝふとさへやちるゝ弟に鮮まつ虫いうらくこうるゝ

并三蛍 組のるゝびや・哥と詞ら紙名ごきる

声ハきで身ものこゞ蛍こゝていふうまこうせひるゝあ

并四常夜 組のるゝびや・哥と詞ら紙名ごきる

るでゝこれどこるつゝきるるこゞいもとれるこれと人や詠○ん

并五籠火 組のるゝびや・哥と詞ら紙名ごきる

籠火よゝ地こゝふ恋のゝるつゝこゝ世ふ代こえるあかの明ぬ紙

并六時分 組のるゝびや・詞を名ごきる

時分例のゝうゝうもくあゝ

并七御幸 組のるゝびや・哥と名ごきる

うちこゝゝあさごもりせゝこゝあきこゝひゝやうゝ弁先やいこゝ

并八蘭 組のるゝびや・哥と詞ら紙名ごきる

おるゝの家よやつゝ蘭あるれいうけよかごとゞうこ

并九桂 組のるゝびや・哥と名ごきる・或い桂べと云て

今ハこゝてやゞうれぬこゝもるれこゝうまこゝふ紙ごきるか

十八梅枝 詞を名ごきる

并ゆ将柏子ごうて・梅ごえいゞゝうこゝおゝゝあう

十九藤裏葉 詞を名ごきるう

萩のうへのとうちぎんでのぐるとあり

二十首 菜上下 哥と詞紙名ごとり 或は下巻をもづくとり

小松原 末ひろひてやのべのゆきをつむ 雪

廿一 梅木 哥と詞を名ごとり

梅木 榊 神 ものさびしき人すべき花のまゆ 繭

廿二 横笛 哥を名ごとり

ふく笛のもとべいとたうしわをそもしくゆ われそつたせれ

并 鈴虫 鈴の もとべ也 哥と詞を名ごとり

大うちの秋をいとしとおもふ しをりすてゞ虫の声

廿三 夕霧 哥を名ごとり

山里の哀をそふる夕ぎりは立いでんそもるさゆちして

廿四 御法 哥を名ごとり

しをめぐれば法のすゝめ 中のらきつい

廿五 幻 哥を名ごとり

大空をとゝる幻 夢ゆめ

廿六 雲隠

此巻は名のみありて、詞いちゝ白紙の巻なり

れば、後さつふるべき歌、雲ごれい逝去とのへ

と也、万葉神亀六年、右大臣長屋王賜死、後作哥

万葉 太皇 此外不可勝計、宿木の巻より六条院也、とゝ

辛ごりさ院 隠居 巻乃中

一、三手隠居ー治てその〻ち崩れーのふることば紙ば巻る汨
わ〻ばをつべる也 抑巻の名ごろをそ汨とるわとハ天台
の四教の法門と例る引られとう紙地ごとさ四ちー作りれ
巻島るる〻〻る〻ー結也ば巻る八九年のとこわるるち
廿七自宮 汨を名ごろ或ハ白巻つ也一名薫中将也
例の世人ハ白巻つ薫中将ごさ〻にるひづをそるわる
廿一紅梅 緋のるる〻びや 汨を名ごろ
東のたまる彩ら〻さ紅梅のいとおもしろくとわる
廿二竹河 横の巻也 東ハ緋也 巻ごと汨ら紙名ごろる
竹河のる〻ちばー一ちるよ心のそこいちるる
廿八橋姫 十帖 巻を名ごろ

る〻姫の心とるをそるを寺る汨の巻る袖ごめれ
廿九椎本 巻を名ごろる
立ら〻んげと彩ら〻椎ば本せる〻る本るるる〻けるれ
三十 角総 るるさ〻ばを名ごろる
わげまれるるごを結ちと結びるおるば四ちるもあいるん
卅一早蕨 るるごる〻を名ごろる
る〻れ芸いるれるる〻んるるへのるる〻へ汨るる巻のさる〻び
卅二宿木 巻を名ごろる 或一名貝島
やどる木ごをひ巻ごいれもとの続れるいるるごる〻る〻
卅三東屋 巻を名ごろる
さ〻ごるひる巻ごるやるげ

卅四　浮舟（うきふね）　哥を名とせり

たちばなの小嶋（こじま）は色もかはらじを此うき舟ぞ行衛しられぬ

卅五　蜻蛉（かげろふ）　うたとことばを名とせり

ありとみて手にはとられず見れば又ゆくゑもしらずきえし蜻蛉

卅六　手習（てならひ）　ことばを名とせり

てならひといふことば四ヶ所あり

卅七　夢浮橋（ゆめのうきはし）

花鳥（くわてう）に云ば巻の名は哥にも詞にもみえざるかことゝや。一ア名目も定句に料簡（れうけん）してそこに釈（しやく）しをはりぬ。うちなしは古哥の詞に世中は夢のわたりのうき橋かとよめるをとりて夢のうきはしと侍るなり

されば子細（しさい）河海抄（かかいせう）にくはしければ遠（ゑんい）からずおぼえ侍り。手習（てならひ）の巻の終（をはり）のことばをもうちかへしゆめのかよひぢもはたらきとも。わかれとも見えんとやわかてんとうき舟のさま紙の程ふかくかくしかるべきなり

源氏目案巻第一

い

一いづれのれ時より　い　叡端の辞甚深也　先作者とわ〳〵りさ
だ〻つ〻へるやうる書〻うり　巻〻れ始終るもそれ趣あると
傍人の雖をおりぐるおなじ　延喜のれ門のれ時の夏也　伊勢集
の始ようも　いづれのれ時　ようるなんび　詞をられる

一いさ　寛也　一いるへの人のうへあるそ
桐壺の更衣の女うへをかめるる心也　ようわかい　撮る也
一いたづら　早晩也　ゝ助　一いさめ　諫也　禁制の心
一いるく　つるき心也　一いるく　いるくの心也
一いるぐく　はるる所汐也　又　辰也　あるようるて心うべし

一いるへ　答也　いるふる　一いるかなるへまし　一ばる
花島やうるるうるぐ也　一いぶせき心　心也　いぶるう
も　おるぐ心也　一いるけるる　幼稚也
一いたづら　聊也　一いるぐ　弥也　ようく　助也
雲の上人　男女也　昇殿の人をば云也
一いるもるる　寛恕也　一いまるる　今将也
一いせ　ゆるるようるるる人　異之所　味勘
伊勢集　玉すだれわるるもるでれ　地代義にようぐどうひかれ
一みてるる　拳将也　一みるるおれいるる　居立也
ようれみて地元の祈也　一いるて　倚也
一いるれるる　いるけるる　解夏也　いるるるるるるべし

為家の説、狗なくゆひきは、が冠人のゝふにまよふて也、禁ふ心と
も、家服の女を、浦氏にれそひめでしにされ心也
一いきほひ 勢也　一五六日 いつかむいかとよむべし
一いとなき 営家　一池の心ひろく 池底也
一いひそれぬ 世にまだ名さへなのはまれなる人をも世上に
一いひならはしひ也　一ちゝの紙なる文 青いろ色紙に
艶書をつかはしと也　一いうなる 優なる事也
一いまはこれまでなるべし　三男唯一心万法唯識の心也
一いひそしけらく いふ心也 言殺 いひころすと云心也
一いひしろひ 争にいひかる詞也 引ちがふなど いふよし
一いくちとおもはれける 馬内が前に女を遠ざかりて後は定る妻なきと也

一いまめかしき物の声 管絃も世のしらべにうつりかはりてめづ
らしからず、今様にめづらしきなといでくる事也
一いさや 不知なるを　一いよの介 伊予守を介といへる
也、長官も次官も職掌はおなじき也、諸国守國乃時も
介長官の事を執行也、おほよりして守を介とも云へり
一いもうと 系図にはおねまでもおれ女をば男の末まうく法也
古今の序にすさのをの命を、天照大神のこのかみといへり
一いやしからずや 人のねごひしたはるや云也
一いだく 俗にいだくやと云心　一いむ 忌也きらふ事也
一いそぢあまりいまはけるなるを うつせこのまけぬべし
一いらへゆけども 伊予介は任にありし時なり 面白き書なりき

一いとまうくいとまうくや　一ゆむことをうけうけ　受戒をうけうけ也

一いさいさへとさそふや　一いさうふ月やをうふや十六夜也

いさうひとをもゆの山の端よりやをうへて野ねやぬ入ぬるもやすうふや

一冊いうへもいうへもあるまじきうれ落葉也

一いぬうれいぬうれいぬうれども　一つへうく　鴿　木草云　頸短　俗絶

一いさうれりうれや　一つうううう　心にくうう心也

うう

一いぬ寺　大云　昔い女子をあてざうざうこもをうざいうう

一いぬう十日　去ぬ十日也　一冊いうけうき　うづの一声ハ鶯乃

うをとをきうつうあうまうるづむい源氏の我身とうて

のうまふうう泥えううめいあうるうあうるも

一つうう　ちうふ心也　卒　一生　一ゆうび　ちうう　あうう心也

一いうび　いやといふ心也　一いのうちううれハ　老子曰　寿者

多辱　一いさうれ　聡　初うう心也

一いやういうのえゆうすうう　花　今業今やううとハ紅梅のこ

うう氏云也　ぬうへいうさ紅ともあうぶ紅梅ものうあうう

うれううて　ぶ紅ぶうう　うれハ今梅うとうへうた略ゆうう

うとハうう　えゆうすうう氏紅ううれうううれ

禁うう　ゆうううううて　一いもをいもうう　氏云也

伊勢　諸　伊勢冊　兄弟初　夫婦と成　ようて　女婦

一そいもせといふうう　一つへのみ　良家子也　稚性うう

一人ぬべ　拓家　上　龍の家也

一つうちく 有職也 又右族也 一一院 寛平法皇ゟ代〻つゞく

一いりこ風ゟ 出世ゟ 五代ゟ へうち 令婦が四へしも用

一いらゞを道ちゝと 後の世のたのゝとゝいへち

一いづれそと 小ぢゝが示ゟ風もそかけうけ家のやゞうとも

めうしゟつゞきいとれちゝ

一いたれいつきうづくゆも

一いこゝなぶ風 生霊也 又ゝ 一条殿ち一条と西へ切塔也

一いちゝやゝ 早速すゝやうちゝ

一みんちゝ 掩顔 古詩の字とゝちゝ字下句の赤字也 何

文字ど 拙 して 脇 屋ちゝかや

一院のちゝおゝ 何ちゝ 家花物語ゟ 名伝と云ゟ 廟の

夏ゟ 松崎のゝ 秋天暦陵と心ゝて言ゟ

一いたゝ 又 春のゝやゝ 秋ゟ 比すゝち

一ちゝのゝてゝ 青幣 白幣 日本記 又五色幣ゟ

一家ゝちれ 雛家 三月 落涙 百千行

一ふつのにゝち 又 渭也 一石山 聖武天皇ゟ 金鶏 仙

人建立云〻

一いちゝ代ゟ代つゝゝ

めひ地ちゝそめ 持禊 めひ地をちゝ深ゝもゟ

一いまめて ちゝ口ゝめゟ

一ちゝ人ち 張騫 漢武帝使ゝて 槎ゟ乗て 天漢の源を究

ゝて 孟律 ゟいちて 午也ゟ 年ゝて 仙ゝちゝ

一いちゝゟ 小井 某記 もゝ代ゟ花ゝちてのゟ

一一世の源氏　源氏と申てのつ氏、一世の源氏、一世源氏
任官せ後、野伝例　光仁天皇、元大納言　以外多略ス
一いまひらかの給ふ〜つ　夜つゞのこゝろや一説秘好ゝとけ給也
一いくちを〜　いくちを代、海を臭を元臭也　我身れうさとをる
ひさをゝる也、船舟のうゞをと海のいさりびをまゞ人所ゝる
一いびき　鼾睡　一家ゝかゝまゝゝ　倩表也
一いゝ〜へを　礼楽とゝくゝうつゝされゝゝ　尚れ代を祝の人ゝ
一いゝうよ　一向也　一つゝゞ〜ゝ紙ゝゝれゝゝ日出先
一いゝゝ仏のれ函　極未法去を云
黙寡山心也
一いけを芸の光とゝこゝ給　報人　悲人　如蹇春臺　註述和也
一いゝゝれゝゝすそゞれ事　未濃ゝ代事れゝゝび〜上ハ白〜

すそと紫或ハ消ゝ深ゝゝ也　一つゝゞ〜ゝ心ゝゞゝ　古今序
絃ゝゝけゝ女の事　一いけゝゝれゝゝ人や　弟子を絃
ゝゝ人へを云歟　一いひもそゆまいひゝれれ
般若沙法の心を仏合ゝて　碎空碎破の空理ゝをゞゝ方等
ゝてゝ堂清乱ゝを今畢竟皆空と説て枝末の機とゆり
ゝへてゝ堂一念のちゝと与へのゝ是とつひもそめけいひと
門もれと云へれれ文般若ゝゝゝゝ方法一如の心れとゝゝ
一つゝ　題　一家ゝいとゝゝて　常侍ハ家
ゝくて家ゞへのゝと代ゝいれ番人をハ古ゝゝ宮ゝゝと也
一いゝ也山　清水橋奥列也文をゝ
一いゝ〜くいそゞ〜くの心也　一いゝゝ槙柱　三位ゝゝ紫のゝと風
ゝゝ〜まゞゝ河のゝん也

ゆへよ加階のこと紙ちう　一いやくちく殺心なり
一夜のうちくるめ〜れ　うはけうこそ人へれと云心也
一家ぢうきのぞむ　女三の家司とらと云て帝王女選二家人一事也
一いちもち　こと氣巻　息巻　うち紙いづ〜いうか臭也
一つう〜へのうち〜　曉瀑天皇世代治治うつる　忠仁云をえうひ
うれはとあうけ結事と云て　それ女三宮と准ずれ者也
一いのちうて　命いうもうちも世の者れ結ちうれば結ちうもうづ也
一いうるれば　罵と法氏うけて　猫と女三うけする也　罵し是ゴ移物也
一いばうこれ〜人　猫うて女三とうひ　半ていうち猫とうて云也
一うふ　文めくうろう也　一つまけて　とひいうれうちうれも
のうこんうろう　一つづれとう　うくへうる清うづ海

つとうろ家のうち成べし　此ねうれもとと也
一いけうけ　女二の小野うて　命いうくいうるもうれ者れ世をかもうひ
うもうすおうちあ〜づとの結ひ〜とうちうて　夕雲れくうこのへる　明め者の
者うけ世の者うへべし　一いそれこと　古き和といつ心也
一池の蓮　時移変去　樂尽悲来　毎年春うる日冬うる夜　池蓮
夏開　宮槐秋落　長恨哥傳　一いけうのちうづ　女人身形
一五障　一者不得飛梵天王二者帝釋三者魔王四者轉輪聖
王五者佛身　竹川　一いうもくうこ　いうちう所謂
一いうもくうこ　おりうもう心也　一いうう日とうへて　還城楽陵王と
あやうあんと　日の者れう　撥して日と年一かうぬすと云て
史記云曽陽八月迴落日　一いうちうづ　宮うれ也　馬うづ立心

一哥 あるひのうつ袋 茅　あるひのうつ袋にて服者の袖をひやる也

一哥 とうすう 大きの服衣也　一いげくとう　もへの奇に考へて

ぞとまるあるうて家こうえ　うれ服者の家とうつと

一あけまくれ いものごも　ごといれの言也　一哥 いげ　そやもつぞやあれぐ　その

字清 とうまうをべ　本よりとまるもあり

一さらくれ いもせの毒のうつこ鳥めいつう　人げてとあうと人づてるで

と云心る打 ひき へてうつうつ薫の中者よ　一枝遣 ひ　ことの路うあ也

一やとうさ いるげくうるはとくうる　鋪日不少 ふき 暮

一哥 いるづ屋る　背もとくあひつれとも　長寅度也　大きもめけ　くのこく　くしと也

一いげこば　今の来津川也　いるこいうとうり　出羽 ジン 天皇 挑戦 テウセン の事也

一いうちれゆうん　馳 いたう いはとうるづ　つ物也　心やもとく　れたうづ　くへ心もく

あるとをいうち　あるげこと　心もとうるこうに心りうく　幸ようとうるも

一いぐこうめ　伊賀 いがたうめ 女也　中媒 たうだち 也　こうめうこ 狐 ふ をいふうり

一いさこけ　長 よ ごというこ云也　一哥 いげくこう　白雲 きくも のうこ山こ

ゆくられこもこ也　一家 いもえいうず　解織 けんれ こそ也

一いうこうもつれゆうげこ　真寅 まこと の織 けんれ　あるずこて使 つひ こびず云

一いうこうこ服　いうくこうこうこ　世俗 とく 云詞也　けこ心ものこうず也

一いりくの扇 おうぎ　宴 いつへ　うつやうこて　ゆ宴 ゆ　こうもうこ　冬の扇 ふうき 也

一いうちの事也　摂政関白 せつせうくわんばくの事也

ろ

一ろくの物 くのもの　禄物 ろくもつ 也　一ろくのうこひつ 禄幸櫃 ろくのかうひつ

一六条 ろくでう　れ息 みやすどころ の夏始て云出 いきぶ をり　古前坊 こまへぼう の小方也　秋好 あきこの 乃

中宮のれ母也　一六十巻とゝ姫と　玄義十巻
釋籤十巻　文句十巻　疏記十巻　摩訶止観十巻　弘決十巻
一六位の中にも殿人はあれども　六位殿人は麹塵の袍を着もする
と青色といふ今も極臈の殿人は着もする也
一六位すくもを　六位冠者とゝ云ふすくもは姫の結りとゝ
一六条院はゝ　河原院を模すゝ
一ゝゝ多論也　一六条院ゝゝ　花鳥乗し　魚云別
業也　陽成院とゝ　ゝゝ　陽成
院の出産　多の門は知ゝ　ゝゝ　業雅院は門を
結度ゝ　ゝ産六条院大臣雅信公の仏ゝ　長徳比叡堂
関白　買海　結度ゝ　物語　六条院ゝゝ

一六条院ゝで　白河ゝ曹ゝ　三条院も里也　又六条院
の内ゝも曹ゝ　一六十倍の中ゝ
ゝゝ七僧を六十倍の中ゝゝ
一ゝゝ　喫嘩　ゝゝ
は
一ゝゝ　多半　北常　多
一ゝゝ　ゝ　一房ゝ　長宮坊　職員令　衛門
ゝゝ　聲華
ゝゝを結べきれゝ　長ゝ也
一ゝゝ　ゝ　鬼鬼　日本記
一ゝゝの夏　皇子三歳ゝて　袴着の例　冷泉院　天暦四年
七月廿三日　宮の時　外例　多女人の日

一はるのき　長乃長墓いふひるきうろうるべー
一はるさむき　将寒・肌とにうてうむ流もま・膚の寒き也
一はるぐさうういく　養心　一はるぐまわれ門と更衣られ
ふ　ふいらしぐーむい養育の心也
一はるとるべ　校とはさん　真天願作比翼鳥一在地願作連
理枝　長恨哥　一はいぜん　陪膳也　四位殿上人
のすか役といふ　一はるえちるくてぶに　ひぶに乃
羽　耶むーー　女のなーー海ちーー時い皆人それこのふあ女乃
ちてぶにはちと給べきさ　今いるぶーと給事あーどぐ云心吸べー
一はるせ　博士　一はいーはるのふ　親主ふ下礼
服の拜舞い清涼殿の東の庭ちそれ前へ仰事拜わわ

一はるーてぐき　草筆のーとふ流ふいふ
一はるぶうぐ　不首　一はやうまーのーとふ流ちやう
とふいふ　首の事也　一はげき　勵　念魚心也
一げんちさぐう　盤渉調い冬の調ちるれいれ・まあひて引吸べー
一はうちーーるう　傍側あーいるる心也　飽足二依不飽
一ちるーあ来のめ　夜ちるれいれいへる也
一はるーく　股がいーちーくとふいふるう
一はーーどんせ　鄙　常のちーーーい皆おうとと是いるーーだう
ちなるるやうーちーる也　花鳥ニ下いかうーーるる板ちーーどうち
て上ーちーーとつーてかへあーるやうにちーるとふ車ーるもも
ドちーーてまーへのちーーーるあーるとせ鄙と名付ーる也

一はつかつ元服也同時
大井の宮兼明親王こうの位に枝れ女を准じて心うべし
一はつ菓子 初て紫とうの菓子くうの心用也
一はつちご 教書文字ひらがなをうたせ也
うさぎ毛をうめを云也
一はじーてん をうづもてい
一はぐるめも 花鳥 山海経云
東海有黒齒國其俗婦人齒悉黒染今案日本は東海乃
中れ國也 世俗はるかるかるや 昔いとうさ女はたたちく
れをはぎれば古代のおぐぎのるつて紫の衆云も十歳
よりのまで歯黒めをするそうー
一はかつ 仁和芹河の行幸次幸二八条院為御寄れ
興うく 後初遣階位を見三史ア王記天慶六年也今案南
階のうる 柱を二そそ上をあるいぶをそうーく
ふくく云鳳輦をひんぐーむうにうさとへ方たのつさうを
紫れ下れ あうんうも也
はの弟九云学のるうれとうさとうぶのやうをうはうさくいさくう
のうぐめうるべー
一芸とつをー 花宮の詩
春とつ侍の宮はあひうあひうる夏也源氏の菓花の芸とを
うをそつへうう
一はかぐろめう おくとうは
そへ用うくぐうれて咲うるれ上いとうぐとこめうるう
一芸の雪さえたる 春嶌時 寺花 名天長 宝壽寺と云
一はうちる 髪そぐの調度の中に海松と一ちさくつうう

事あり碁盤山菅山擬海松青同の石二並之也是おをれ
髪はらはらそりやさく　一けうるや　菱亀こいて
うせうへはあはへうるう神のうるとへのまつりのうる
ひるぶ紙結うるうるいくうされどうひうるうるなる
一芸やうるうるうるうれはうんぎうれどうんひ何ゝ哥あれども
所祝の心との結也只芸はうでめうるうまいうもんの心うるうる也
一八省うるうてけうるうけうる　孝徳天皇大化四年二月始置うるう
大極殿とび八省といふうで八省の本院うるう
也朱雀門の内一町はあり南限冷泉院北限神泉門東は東乃
坊城西の坊城を限也出車は八省の内はうるうるべし
いうで車は人結の夏也　一白帽子とうるうるうるうるうる

前漢書曰音荆軻慕燕丹之儀白虹貫日太子畏之　燕乃
太子丹ゑ始皇とうるうるうるうるうる今源氏とうるうるうる也
況未ゑ日はうるうるうるとう角云く日はけうる義也白皆
とうるうけどもはうるうるとうるうるうるうる心ざうるうるうる事
ゑ荆軻とうるうる也今源氏ゑ荆軻うるうるうるうる冷泉院を
太子丹はうるうるうる　一芸秋のれうるうるうる　春秋所
讃須同云源氏のとうるひ結由也定うる法事うるう是也
源氏のとうるひ結元一勅禁中うるうるうる定也
一けうるのうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
一けうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
ひうるうるうる

也縹色紙　一はうし拍子　柏子を云也
ひやうしと云ふ事もあ　一はちがき　撥眼ちかふる也
紫明ニ蜂吹拂心也。是ハ深くあて読
一母ちくろうしくそ　朱雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ第十四皇子
まて此女皇の母中宮温子昭宣公の女也兼明第一親王あれど
更衣腹故人臣也此例也　一はうちまきおやニ　手愚親ニ賢
まのあたりわが身況愚子乎　一はるもしろき　鼻の動かや
めくや目の動とめうごくさきをいふぞかし
一はがため　歯固元三の日の事也。歯ハよはひ也則よはひをもよ
めうに歯固ハよはひをかたむる也。膏つき六本に打交せしも一の台に餅
大根橘をもる也此餅ハ近江の火きりのつぎられ餅を用ゆ則其国乃

一はつねにぬべき　おさなき人
鏡山の哥を詠ぞ　一菰におれつ　俗によがれ切ると
それにて文書哥とよみをと云る
云心也　一方等経の中に　方等経の中に
四教とあるべて多くに説あへり。是ハ浄名経也此時者つらと
あるもつらず今はさらでもえ深。不化の衆生ぞ云ふと去くり。一会
の衆生ニ空猜乱して加葉泣ニ三千よあつひ三千界へ泣声感元
とふりふと云心也　一は孫とあるべ　四皓朝にお仕の言。
羽翼ハ已成といへり　一はなちいで　放出と云る　花鳥
一鋪。不塗寝殿と云て母屋の内ば中ぶよけて中を障子あかと
枝ありんハとよひつく不代云也。れ帳障子立てへわを中のと云也
一八条式部卿の乳方　仁明天皇の子本康親王と號上の父宮よ件

文也　花寄事

の心也。うつん袖ハ旅衣のうれ焼物ハ袖ハわきくハ心也

一芸のくしけのめさ袋　すきさうの袋也。三月の乗ハ芸志者

ゆくさもの細さ也　めさけ　旅物の人ハ袋ハ入て送物也

一けうれ下　けうるまが　花ゆがゆつるまるびうる者ハ神の納受のいちう

そ〳〵つ心ちを

一芸のことのひハ芸の調ハハ夏ハ夏ハ　一けうこうれ　股黒さ也

さ。源氏のいく物く笑也　一芸のをとくのへて蓮花也　一ちう葉成　事也ハおるで

蓮芸ど望れどもこそ今日の別ハ口〳〵也。女三の法事ハ身

とうこうて結事といつ。ふ倉　優心也　弄花事

一幻　羽衣の　相応ハをこれ源よりいつり。早竟消空と後ハ也

一記梅　芸の香ハ　芸の香ハさそて　ハること。早下の心也　風の

ぬうをとをまぐさずまいつるべさ〳〵　ちれどもこれ心也

一竹川　けいつ　ちう　花家礼して　ながくへも　花上の　ハ心ざ　ハ

元宝　ちうれ　無法　一橋姫　橋下の姫大明神ど也

一芸うちう本　ちう　塔ちど也　一けうせ　太刀也　寺の名　一説

みそぎれ逆の車ちうれハ法陽轉ちうべ〳〵

一冊　けうるつや　中芸の除服　とうこの心也

一芸ちうせうたこ　ひぐのうこが芸とうせうの事を

一芸のちうに　不是花中偏愛月　芸閑後更無空　元性

一山のふぐうと　大芸のゆうちを　ちんとちひめくどもを也

一舟ぶらや　浮舟の舟ハ卑下する人也。夜前の時ハ卑下するく舟に
よ数て舟をさしとうる也　一けんさい　犀角のあつかふる
所依をうる也。班犀帯ハ官位の位の人帯ニ用之。　云つ服者は犀
帯といへる班犀と云すにやらぬしの帯也
一ゑとつくも　女郎花の名ハおくいちらもる人ての家にいりひろ
ぬそと也。実にようこうろと　一はきのミ　蓮子数盃と詩に
も後ら盃の名也。蓮子の血なる青磁盃也
一葉のうすさとし　陵園妾云。新象ゆ花令下万葉落　白氏文集
此詩ハ君恩のうすきことをいふ。今拘の命ハ命の事にのへたり
に
一にけるしず　無一顧気也　うけるきとてかなきと也。うけるき

も御ぬ也。うけるかくとくハ落とし御かる也
一二のまち。続ニ町と云心也　一にうけしたき　冨貴なる家を
云也。饒贍　一にうちまきのうち　俗人にする也
一にうきうるひと門。それ君どのことちるとと
一にらてわすけろき事までハおもしとの心也。くらしをわるぬ也
にしのさい　西斉也　一にあすく　無二　無二と云心也
一にび　祖母の服衣也　三十月の服也　洗衣也　こをやうるとハ
いろのうれと云也　一にじめられぞ　すびみの黒之の
すうるさき也　一仁王會　七難即滅の文ある也
まうしきとところ也　一にしこうほふうしよろ郷の心に
いつう　一にびいろのきす　服者の衣装

のへうもうようびなの卯を用ゐる事なり　て
まつてまつるらそんや惟ハ是もまびいろちを
一とちにうぐ　入学也　一に法島より鳴島ハ枕詞也りげを
るゝぶる島也若ごもとあやめとうけをるゝぶる也崇敬と源氏
とり引るまぶとゝゝれや　ぶくこまハ若ごも也おもこと略也
一日本記　六巻始神代至持統天皇御世
一西山ちるれ旨　仁和寺と云也光孝天皇れ
仁和年中よりたゝれる　仁和寺と号ちゝ又義平れ門
ハ天暦六年三月れ出家ゐて四月より仁和寺より選れあると式物
語の朱雀院ハ彰平れ門より准じてれこれを合書れ也
一にゝのゝ十方　後是西方過十万億仏土有世界名為極

系　阿弥陀経
一まつさをより白ひるゝと云也　一まつひもゝくゝろきうへのゝ
えび深の袖ハ表上へ　の下襲れとハ云つの下襲のいろ也
一にいゝろゝ　れされの声とれ息所のゝ沼より
ゝて　よあるれ身と笛とゝてのゝふゝろを
一にゝぶ　純どゝろゝ心　一にゝぶゝさこれゝゝやハ作るべき
幼
梅仙窟　容顔　似舅　潘安仕之外　鍔気調　如兄崔季珪ゝふ
妹
の夏とゝゝゝ女一文より仏ゝゝ白文の兄ゝゝ世紀せ三の人
と云心也　手一ふ文ハ女二文のれれとゝやうゝれゝひゝ人ゝを
なゝてゝ紙しるゝ　紙ハゝゝ心ゝるべし

ほ

一ほい　本意也

一ほく思ふ　かりそめ小躰也

一ほけ　火氣也

一ほうらいの山　是よりを物ごとを

あさき女に身をかへて云也

一ほうけづき　仏法めきさ也

一ほゆがめて　もくるとくるしめ也。方曲也

一ほこりか心なし

一ほのかにも　ほのかに聞し

事を彩瑞によそふ今少将が妻なれば。それとなき心のや

一ほのめかす　女はおもはゞ。我心がすハ源へをひそかなる心也

一佛のれきらくハくしきに入事も　従冥入於冥永不聞佛名

一佛ハとのけるゞて　上の句にほどけのれきらくべとよミ。家もし我

こゝろ得しハほとけの志ら路をんごれうるなるべし

一法花三昧とこゑにふかきれきんぱうれ声山おろしもにをりて。

止観に四種三昧あり。いはゆる常行常坐半行半坐非行非

坐四種也。法花懺法は半行半坐の三昧也。懺法は天台大師

或說宗式によりて毎日六時に六根の罪を懺悔する法文也

六条有房つ云懺法の曲に山風のおろしまじり瀧の川おとの

ずしとかふ口傳の事もあひそへて書たる音よく女房ずき

あるかはけるに今ハ此名目をしらず実なる傍もなきをやさしと云

一ほんごもに本にも也

一ほそろくをか　保曽呂倶世

利叉の名也

一ほとく　殆と云心也

一ほそ殿　廊也

一法界三昧普賢大士　南無法

界三昧普賢今相と云ハ大士と同事也。法界衆生普賢と同體

と云義也
一ほうらしげは 何ちゃうる心
一ぼけられて ほれさる心也
一ほうけし 仁徳天皇の御時始て
惚れけり何也
一ほんさいのうろぐ手 世を改
一御事を能くとし給也
一法しいひそうと 寛筭供
奉の事ハ文何事ありても出家ともよろこぶ所の始めなるしと也
一ほう九里よいまだかちめるや 花 山形のあぐひらく面白く新
あうなる心也
一ほうとうすさうるは花うつ
御のながうける蛍をつけし事ある河内方にいふするさ肩あらど
もし只ひぐるしのうのうすさ京よりあまるや
一郭公るへし 四更月交雲外語 二十三更後雨中声
一佛のいとうかりしさ心にて 凡如来出世の本意ハ凡聖一如菩提
不二の理を説て衆生のまよひを速に離さんと也しかるを大悲
心ふかうしさ心也されば玉も実報花王にて花厳経説給時ハ
されも法擁まうなりしそやうらくあるじとゆるして衆生まよふを
みへて仏も報身の姿にて修行の報まて是又かなりしさ形に
て説たまふ三界唯一心の法なれバ仏の心もうなりしさるなり
一ぼうしげんなう 佛の内證あらはれてみれバ則菩提則
煩悩也縦ひ実相にして更に別の法なし
一ほそびけうくされ 絹櫃也
一ほうしく發 驚く義也
一ほんはすべき 玉と女の本と定給ふ
一ほのうち ほれさる心也
一ほうしかる 朗あきらかなる心
一ほそおゆの 未通女のおくりわざなる也それで其の非也 若右進

女れなどゝ云ふ也 色用也 組ようて紐と付たり

一佛のゝぞしの 仏經は滅度 志の人ゝ 常住此不滅也と説
給也 不滅とゝ云ふ 身は退轉しゝ〻 危云の心と云也

一ぼんしゝ 梵字也

帳臺のうへ 仏ごおろ〻く経の机とゝれうべし

一仏のおり 多宝の仏 観經云 阿弥陀仏 去此不遠 極楽荘厳

やうゝ云也

一仏は生なり人 塔の我事也

のゝ也

一ほよいでゝ 中 志の仏は出

ちて 上に地ひのゝとゝ云ふ

地ひれば 地ふ落と云一義也

一ほらけい 經云 實成者不誑者云

一ほらとゝ その色也

法性寺

一ほうしう 貞信公建立しゝ也

一仏のゝ 仏のはまゝ 仏名をすくなく入て 名を

一ほうゝ 法の心 名番の密をすくなく入て 名を

一ほづえ 末也

一ほく 反古也 ほんゝ

へ

一べつ 別納也 前は立ち也 曹司人の住也

一へんゝ 變化也

一へいち 花平定文のあぎ名也

ゝ 平仲 宇治大納云物語云 平仲が女のもとへゆきて

ゝちゝて 硯の水入をふとゝろよりもちて月をめ

けるとゝ 心ゝて ゝ云とゝ入ちゝ

れば女 鏡とゝ

我よりそはあるは我がよりすれも人よすこつくかれぐしきる
人よすこつくいはるにもやすく住りんこれとしや
一へんたき　文字のへんをつきていふつ美しうろかしと云事ゲなりも
一へいじやうの緒　瓶子をやくるなり也
一へんげの物とおぼしめし事　河海　四生の中の化生と云べき
ものと経されられば人界ハ劫初の時こそ化生なれども
もしられ今の変化と云ハ佛菩薩の神力或ハ定力よりまた
ハ善悪の業を感じてかりまる形を現ずる事あり変
易生死らはこれと云や布袋和尚ハ弥勒の変化寒山拾
得ハ文殊普賢と云がごとし　花鳥上下略く
一べいしゆう　賀茂八幡社参の時四位四人五位四人以上十二人を

めして具して於神前東拝せうらせて也それを陪
従とは云也手ひ両どの陪従ハ近衛のりされ人々也
一へぶそねる　十三の我ハへぶそねるも深夜の心が志つうし
らまじさきの心也
一へそるさ　心ぞうつハ無未開
なれども仏いうごとなるも

と

一ところめ処治　時めくはうと付うろてまを成べし　生人絶しく
若めくこそ心同し　一とのね　宿直
一こころえもれもの紹ち後　紫の字也
一とくもやくされ心也　一とげさせ　何そもむこぶる心
一とうもしびとうけ　長恨哥ニ孤燈挑盡未成眠

一うんちゃく　屯食　はくそいわや今れ島のみこ同〜

一ところ記　所をげさや　一ともちゃくとも　本妻ところもや

一こだちゃうふげーの心や　一らちゃうえん　元出ーーーさんの心

一ごちゃ　共や　友ごちゃ　女ごちゃ　婿友の事や　所風共あり

一ごだちゃ帳も　祭馬系平　詞や　ごだちゃうハ幌やちやうハ帳や

一ごうもちゃくて　無勤や　一ごうでのよ　元出治や

一ごうちゃ　産ちゃるちゃるちゃ　ちゃうハ素産れけうれや

一ごちゃ面へく　郎ごちゃうへ　ちゃう心や　ごちゃごちゃうちゃうべー

一ごけごちゃうー　れ息所れ　始ハつれちゃうー　ちゃ面ぐいひか

びーー治て　又ひちゃへーーとづれごちゃんいとーーーちゃうと

一ごちゃうまごちゃうーーいちをめて　ごちゃうちゃごちゃ　ごちゃうめちゃうて

一ちひいれど　まごちゃうーーちゃう地や　一ごちゃちゃうのこゑ　漬短聲　僧坊

一ちゃへべー　引声れ　あちゃ　強欲

一らに　外や　一らにあちゃて　一らびあちゃーーくハ

僥曇華の夏　人壽八万歳の時節　金輪王　遇四劫　其時海

水半減ずちゃうて　ひ光出現　ずちゃなり

一らちゃてまつち　獨鈷　一といめとふちゃす　史婦の

中ふけいちゃへちゃてもあーーずとや　めけちゃごのいふちゃごちゃれ心乳

一どまちゃ分も　どまちゃ分ハ源　清　蓮や　心とちゃんちゃ　れ息所の

もちゃーけちゃうちゃのひーーけを　けのえちゃーー結や

一とうちゃんのちゃ　西洞院ちゃ　東洞院ちゃ　いつべー

一ちゃうくハ　花　登花　貢ハ弘　微貢のちゃあちゃ　梅壺ハ又　釜

花園のうへにあらはれもうられちるさ園舎やむれうるとい
ひらく月人もすまず塵よりむれうるる
一このゐ[illegible]ふとうたげうるる花鳥夜行すうを清よ人
乃をくへうあれ唐の前うてこはぢられといへるゆべしと云
一うひとけども 花鳥 小山羽根拾云宿神実子時左陣毎
刻夜行丑寅刻 右陣 勤行丑刻物節 工人中宿神俳
[illegible]略す 一とうひはうに虎狼
一友ちとる 我ひとりをもへいよ鳥は友をつれてひとれ心やこの
一とうに深もし又新の人へよりもちるふまもやわんとせ
一とうひ 知人也 一とぶやうに飛揚也 [illegible]やきせ
一ううげいもけうきは風る乗十三歳の時遣唐使りて

波斯國より到る 聞琴壺歩行の者也 阿陀羅琴を造りて
さへ一度あり花うつ今の拍子 [illegible]
うへうるうるる悪風よりひて波斯国行又梅檀まれ下る琴
とりておそぶ処より琴とるうい極てうう霜雪をふる
天地とうごけ日ひよりうてうりて名をあげうる也
一うれう化の節会 年中の節會也
一うれうれぐ この契ハ子よりへ母親じ達る也
一年うるうて家のれうて 落雲係間の夏三月まで也
一あるうの大ここやう 大政大臣内大臣新任饗の事次
一うりゆのるれうる 箏取由也 ゆの音也 左のようて 法
もく事ちるべ一 一ううる 年忌 一説ううる

十よミつるを云也れい年満也

一年月へぐるめれぐおろざを

一タぐかれ　ぐ詞束摘巻くるを月おろぐ夏をかん高るをんタ

ぐ月の事とかるわ

一ぐ月とて　月の心面いろ海わ

ぐの夏を夏ていぐきされさいをいをわぐ　ぐかるを坂盆を

られるぐ神をぐぐぐをぐんを也盆ぐをんを忘て

まれぐ神心けるまるを詞をを書を等ぐぐをての月を

紙逸月をて分ぐを盆ぐいるを也むをめぐを分理をあぐわやう

ぐを云ぐるを也

あわ月哥れを

一ぐ月を　指遺集をめぐの類

調系也　島のぐ岩やるを　島を一越

一ぐわぐをを人花ぐれわ近海を云ぐを

一梅ぐをぐて　あぐをわて　奥也　昔をぐるぐを心也ぐをぐを外

也ぐを忘をるを也

一ぐまるを入て　ぐぐけるを

ぐを

一芸家の宣旨ぐ内侍ぐ

女の宮也宣旨ぐ内侍ぐ兼宮ぐを人也れ湯をまるを人ぐを

べ

一年ぐれ芸秋の神弟ぐ

明石入道の乳を毎年ぐ神系毎度又ぐを外を乳をくを人

毎ぐをみぐを

一ぐるすぐを　替古すぐを

ぐを

ぐの一ぐ琴をれぐを

一時ぐを雲霧をぐ皆河海ぐを

岩のぐをぐるを人のぐをぐを

ぐを也ぐを今一れぐを六月中十日れ祖を雲ぐを

まれぐをぐれ門部をれぐを乃

ちくべい 火づくりさるや 名の是いろいろと云ふ也 ちうーの
れ門の引ふる 屋ぐけて 雪みるとんぼつくりふれ 五よい
いまくさめくるし おやしくめつくさ人へのけえ云ふ
一らもせめられば 辛れくれのせもちうる心也
一ぐうーけと 柏木後三 辛ふもちる也
一くちのせう 源氏 論代 部也 渡 寄いふい 雄 大い 雌 雌 ふれ
ぐうくくと 寄を 島 ぐいへる
一このねずくるくーー髪とさけうう 御りさうづくー 束
すふ 総角童 髪ど人のすぐくちる
一島の巻も 王前五 一島不鳴 山更 山ちさうる也
一ぐうぐくれど 不動也 一ぐくれちる 辰日也

開うさ毋
一ぐーふさを 常盤 ちよくもの
一ぐうう角い 灯臺 一ぐくれど 十 又を 何ふ
ても用ゆ 多の女一のうや心をけーふ
一このもちのくそ 白髮の童名 体 書 女ばなる
の宮を呼 夏常の夏也

源氏目録巻第二

ち

一長恨哥の れ 白氏文集の 玄宗の 楊貴妃 ふれ
のひーも 今 桐壺の れ門の 更衣 ふれのひー 月心也
一長生殿 玄宗の れ 殿の名也 桐壺の巻 ふれくーー
ちる一のふる ちくぐ ちる 一ちくぐ 家ぐ ちるぐい

心や　家女すでこしらの縁あり
一ちいろも　みちひふ塩のうけ源の心さぶめるとあり
紫上やうく　切とるびみ心ちあり
一ちやうふぞうしちぐ　延式云　凡齋内親王源行豫定
監送使　参議一人　或八中納云　弁一人　史一人　六位　小官人一人
兩家云　大臣　着陣定　凡前大中納云各一人　参議二人　四位四
人　已上　勅使中納云　参議各一人　四位六人　長奉　送使中納云
若参議　弁　史　中務　近各一人　已上　蓑向下外記云作式
アニ云　花　今案　群行の日　凡前と勅使ら　河原まで　供奉
して　帰参して　長奉　送使　停郷まで　ちぐひなる　上
洛の時　弓場殿　すくて　下着の由を　蓑門

とれば　宮ちれうの職事して　作ちる事也　河　指定集乃
所の司を引を
一ちどのへうなるめふ
七十　老　致仕願　其所　仕ちる　車　若　近江　執政　致仕例略　致
仕ぐいふい七十よりて出仕すまらたるてびるもちぬ
ちる車　先祖の廟　これとちる　良あを　故　願車の
齢ちとい　地官　辞ぐいへちも　孔政　良あちへちる
河海　ちれちるく　地位
一子　校つれのち　千校常則　生　高名　保共　盛工也
一長恨哥　王昭君　楊貴妃　馬嵬　ようしちれ　王昭君　歳
狩　ちぐ　仍ちく　いちく　治也
一ちうちすく　年　先のよて　事也　柱琴　て

一ちう琵琶そうじ云　一中将のくよのけうそくつぶ

八月四日と荒手番　八日と云る花手結した近乃

真手結也　八月八日ゆあるれち月雪中将た近ちうあ

とのこゝを引て赤うんずる由ノ結也　年をつぶい馬

ゆゝこの時二人ぶうけて射る事欲

一ちうぐんよりちめべき　いづかたとつる心也　二仏の中男也

一ちうすゝろ　遠ゝる也　一ちゝき　地鋪　唐廷　大敬

高麗へうつけうる物也　一ちゝす　快賢　書物の快也

一ちやうれうつぶあ院の廊のゝぐのゝ紙いひけるゝ

人ちうべ　一ちいゝゝゝゝゝゝゝゝ　乳ゝ

ゝめと云也　一持仏　持仏堂いまぐゝて

ゝれぶれぶゝも　先仏供養の用意也

一ぢんのよりい　棚也ちんい沈也　一ちやうしぞめ丁子染　香の名

一ちゝさまゝ　近衛大将

一ちゝぶゝ　ちゝ

一ちゝほい　玉ぶゝ　京ゝちちほいゝゝゝちちにまぶゝる心

ゝ

一りむぶれまてあそひ　何ゝてもぶちゝゝゝゝかの事とする

と　除時ゝ云也　一りむぶれ糸の調子　賀茂乃

除時の祭十一月ゝあ事也　前日ハ中の酉也　是を小祭

と云也　調子ハ午日也　門蓑ゝてあ是

一りちれちゝへい　律ハ秋とけうきゝぶ女も秋とつきゝぶ也

しぐるゝハ十月なれど冬ハ秋ニ属す

一柳花苑　上古ハあり舞や今ハ絶えぬる

一りんどうさやく　客とこさやくゝとゝむべし・六条院大臣ゆゑ

摂政の職を兼ねうけたるれば殿ゝへていくさや四月三日の

弓客人の乱まれるとゝ

一龍頭鷁首　竜ハ水をこゝろゝまもる鷁ハ風を心ゝ得すゝや故

しゝ形を作るゝ　一りちをべつざれ弾ぜうゝ

ゝりちを次呂ハ長律ハ秋也日本ハ呂律唐ハ律呂本ハ律呂也

云律ハ陽呂ハ陰助也然ば僧ゝるゝ呂律ゝ云ひて律ゝ云ゝ

すゝや長ゝまゝ長ゝ添氏ゝ作心ゝ調曲ゝ僧ゝるゝ

ぬのゝゝく呂律ゝ律ゝ次ゝすゝゝ僧馬ゝ付呂律ゝ

付ゝゝ本朝伶倫のお作ゝ呂律ゝ陽陰ゝ周来ゝ

一りんのゝ　ゝゝ弥義ゝ紙引ゝゝんのゝゝ云也

ぬ

一ぬざすべし　ぬさすべゝゝゝゝゝ

一ぬりばく　誓言　額突　礼拝也

一ぬさ　稜麻　撓ゝて道祖神ゝゝ向ゝ也

一ぬもくまゝれぬゝ　添のゝゝ

きゝ所ゝハ行給也

ゝゝと云也

もゝゝ云心ゝ叶ゝゝ

ゝゝ祈也

うすごろもにかゝれどもぬるきとめぬ玉の緒なれば也

る

一るりだま　玉くだりの童名　一るい　親類也
一るてん三がいちう　流轉三界中恩愛不能断棄恩入無為

を

一をさしめ　いひをこさんとする心也　陥
一をりにふれごとにすぐして　夜者専夜晝同輦　長恨　やがて
一さかしきせも文衣のそのまゝおのれ也
一をとこれは　おもしろき心也　河提
一をとめ殿　納殿　在後涼殿ニ法局ニまいらする物をおさむる所也
一をさなきすけおておひすゝ　助及成人の心也

一をさめてまつる　葬也
一をたぎこのあや　鳥邊野を云也　愛宕
一をもてきさ　面目らしき也
一をしたちかゞくしれ　押立皇　日本紀　俗にきはだのよる
一をもの　心也
一をもの　御膳を申也　膳
一をも　祖母也。極る此物語ようなが私おほくもおほせられ
一をほやけ　公
一をほして　ろくろきいふ
とおぼしけるど云をおぼし。お手紙をやもとよ
まよふりて心なくべし　一をりしまず　殿の東のひさし
清涼殿也。御殿とも云也。東廂絲びさしあるべし
一大殿ごもる人　殿人の上の大殿ごと云心也。二人にそいぬ
れごとまつらくて　元服の前ハ赤色の袍の腰ぬきを

也。元服以後、膳をあひて、葵ある袍をきるあるや。又淺
葵ともいへり　一れいは、ゆ紀れ酒
一れいとぶらいさげ　右大臣の浄氏より、葵の上の事をざれ
ごとにはのあるものをいへり
一れいとぶまいあるべき　れ稚の盃酒は、度ごとに、引入の大臣は、
文よれ前よりして、れ盃を給ひる也
一大うちき　袴とは、さねのるや也。是は大小あり男も束帯
亜衣などにも大袴いとあるや。大袴は男、小袴は女のさる也
一れうひはもれこもれ　打櫃まげは、常の形の事也。
こもれは行ってゝゝ　西宮記云本物校物共
菓子や。餌をとりて。餌をとりて。菓子入て、木校或も松

一はは也。大臣、年ゆて、後ゆ膳ゆ給ひ調ぶ。元服の時
の人のちげゝる也やゝ　一れいはいとの　大臣の也
一れいはゐくゐんごろの心也　一れいゝゝゝ　かゝゝゝ何や
一れいさく　彫ぶ云心。或は頭、又は更ゝ云心也。花優長ある変
也。面白ゝゝさゝ紙も云也。有ゝゝゝ
一れいはゝれゝ　油火也　一ものゝ　河　各競　八雲抄云。
ゝれくゝあゝ心也云ゝ　一れいはゝゝ　大總　ゝゝの心
一女のゝれいゝゝゝ

一れいぼうこれ　大やうよびどころや　河穏

一女房ども　源氏とかたりたるを　十の和七八とはいふ也

一ちうき　年ごろ　我女をもてあつかふ也

一れいぼうやけだものこゑ　一なきごゑ　鳴呼　ヨコカミシ　ちうこれすと云

一れいぼうとかはとこれ同心也

一ちうじん　ちうさん　恨　うらむる事也

一れいどころ　おそろしき心也　鷲の心とも　ネトリ

一れいいろ　おそろしき心也　面白　メンボク　とうしゆ　俗よたくさんと云心也

一れいもてあつかふ　放逸　ラツシン　文選　ちまり用　うらくおそろしき心也

一なをひとりなを　小指　コユビ　とろひとろ也

一れいぼいろこ　あせごも

一れいさうすかしまとれ　祖也

一なをこうしく　ぶやうやうろう心也　ゆうやうろう也

一なをこめさて　臭　くさ　のうごく心也　おりきうはつると云

一れいもう　内産　コザンドヨ　有也

心也　うさんろうこれ　ぶやうと云也

一れいはれぶやうと　心也　一なをこうへさて　ひれとおさへうる也

一なをこうこうこう　一れいはちのこ海　路　タヽカ　やれ路　ネホサ　大路　オヽケ

一なをのれひうろうこれまもひこけうろ　ダボ　とそんこうこの

縁　エン　うてふれまもひこけうろとつへう

一なをちうこうへ　遠近　ヲチコチ　也

がとこうろと云也　行うても　ヲチ　うこあうこれ　病　ケタイ　無　なをこうこと云

一れいこれびうろ　義　キギナ　ざれと云　流　セツ　もを　ほうこうろ　声　コエ　也

一花ほそよ　作(オホセ)や　ひつけよ　心

一花ほけるく　天心(ケキ)　ほけあること　ほけるさと　人の

一おくこるの人　行人(キヤウニン)や　一行くまつろう　おくかさ　心や

万葉(ヨロヅ)　おくまへどうあつ　又　奥(オクノ)　日本記

一花ひらくん　つまは　紫(ムラサキ)や　紫と　花の　ものと　人うつくしん

そこるさと　紫のとさらふ　少　浮(ウキ)るる　ふくるる　心や

一花ものさ　海よ　ものち　紫の　よも　源氏も　おもて　やうに　あこと

ふれ　ものすと　のもや　一をこるひのらう　行労(ヲコナヒラウ)や

一花ちく　れ　貢(コテン)や　一花　つむ　へども　ほけ　ものこと　ものし

タゲ　の　巻　つづく　ちう　うち　人　しく　へども　とり　心れ

一花　ふくこく　別(ベチ)　ほ　人　のあること　や

一大ひちつ　ちさ　大　八の　笛　河　大筆(ネヒヒツリキ)　藁　詠(ヨミ)　人　捲(マキ)　仏　宏　長(サ)　一丈

尋　故(ユヱ)　罪(ツミ)　八分　律(リツ)　書　圖　云　大筆　筆　小筆　筆　又　云　丈　八

為　短　篇　玄宗(ゲンソウ)皇帝(クワウテイ)　前　鬼　羅漢(ラカン)　也　好　吹　丈　八　被(レキ)　撰(フルヒ)　出　云

一れ　ふ　ひ　そく　れ　基(タイ)　秘(ヒソカ)　色(ソク)　今　の　茶碗(チャワン)　也　秘　色　の　磁(ジキ)　也　遊

別　ちう　ほ　ち　也　ち　翠(スイ)　青　にて　ほ　に　鳴(コトフル)　ちう　仍(ヨツテ)　是　と　秘(ヒソカ)　色

して　易(ヨノツネ)　常　に　不　用　也　故(ユヱニ)　号(ナヅク)　秘　色　と　云　ふ　ひ　の　色　也　ひ

そく　の　つち　今　葉　ひ　そく　ふ　わ　ほ　ち　茶　碗　数(ノルイ)　也

一花　ぞ　ものに　せ　ものなど　の　ものこと　也

一花　ぞ　こ　ぞ　ふう　正月　十四日　の　日　よ　京　中　の　僧　よ　月(ゼツ)　楽　して

物(ヒツル)　ほ　ち　ち　ち　ち　て　大　家(ケ)　ぬ　ぞ　こ　ふ　人　ち　男　淫(ジヨウカ)　所　こ　ふ　れ　せ

ものぞ　と　代(ダイ)　に　ほ　て　ち　今　の　せ　よ　子　秋(シウ)　万　葉(ヨロヅ)　ら　て　あ　り　淫(タワカ)　奇

を子どもつくり花鳥和音の巻り条

一打ひちくとうと　上の御ゆあくくんさくへば寒よ生るをもう

をとく云や　一花ほろくとうとわうと云こと

ハ衣どくくさと云心なり　一れ　ずくくかくいハ三月　花五九

月ゆ卒去の方いハ十月の服なるようて十一月晦日ゆ除服ハ

くくふ也　一花ほくくくあ事　桐帝し

源氏のれゆ　ちくくなるくくく

きろくへのトぐそれとまちかうハ略儀さで云て作り
一たはやけぐく出ぬくそうしてぐすはて仮中将賀茂
ようち宣下のくぐきうけ給と云や
一をらうくこにちん　りぬのはかりかうこれはせんらや
一たうこうぐらる　臆病の心也　一れをぐし　源氏のとばといちん
と美姫ようてれのすをハ入うるや
一大うこに　ぬのすぐるハ源や心とをくハ心とうるる四也
一たはぬすぐる　常れ袍る指貫を着して　裾をりいれつ
れの袁也　袁長る　裾をりいるハ出立ものべしおぐれうハされうるこいもそのハ心たがいうべしはなみハ王の字
也　ち人のするちぐ忘ちう又袁長すぐるを利出ぬうこすぐ

一ぬといふ流あり
のおうるくまるまる時ちるうぐ　一ちをておうる　源内侍を源氏
一たくしう男こちうを也　花　村これ女親ま内親王天延三年ま決定ま立て下向し給
れ海　微ま女王　童明親王　そのてぐちのうまれ物語ま六条
れ息不と　微ま女王こちるぐくへてより給れぐうれうれる女子
あひそひて下向の例ちるうにうちうかくハいるるるべし
哥
一をらめまう　赤通女子万　サ女　基礼　乙女
一たくあるこうをし　暦
一たうを云ハ八雲　おうのけ下女也　ミうくひをまうをる家
中こ物代物ま下女也　不浄のうを生姫の消二幅とめひれて

あの端を結合て、ぴ丸をひぢちよりけおもやぴ女ひもちゝ
云、聞やゝ　一れ伊え殿　秋王伊京の時、大和
路をへて、摂津より廻て、難波ゝて、七日より大江の儲所
ゝ付給、十日ゝ入京給やゝ　故ゝ大江殿ハ秋王殿　飯家ゝ旅館や
一れ代一度毎年の旅ありれば蒸ゝ多かとゝいへるやゝ
一恩賜のれ衣ハ面こうに　去年今宵侍清涼　秋憶詩篇独
断腸　恩賜御衣今在前　捧持毎日拝餘香　聖廟ゝ作
一れそハ内分をきれゝず　れ門の源よれぞ多へる変心前り
こゝろゝ多れど、結ゝ結ゝどこゝろゝ
一れ伊い殿　大炊殿　新撰示記　巨炊屋　旧記ゝ多、大炊屋ゝ書せ
一れめゝぢゝひめて　朱雀院のれ月ゝぢゝひ結ゝ、三条院ゝ

れめゝぢゝひのゝゝ多ゝひゝをゝる人し
一れ伊ぞゝれ星の光や　七夕祭ゝ多流の糸結上ゝ
星のひゝをゝうゝしてゝゝ多ゝ
一をのゝゝゝゝゝけゝ多　舞ゝ
一れ谷れ　をゝゝ多れ
一をのゝえゝ　晉王質石室山見数章ゝ囲碁ゝ質一物ゝ
棗核含之不飢　局未終斧柯爛　既回ゝ復時人
一れ伊ゝあゝび　大れ種や　一れひゝめ　松風の巻ゝあ
き根ぞゝとあゝ友めぢゝみのゝ
一れゝゝれゝ　ゝゝゝハ生ゝや　髪ゝゝやゝや
一れゝゝゝゝ　牛車　元中納言俊三位れ位ゝ上て八ゝのゝ

元内大臣ちゝ一位ゝ也ゝ侯一位也聽年車也寛弘八年八
月左大臣菊原羽尼宗年車入待賢門上東門おゝ
一おびたゝしけるゝ所おすゝ　とのゐすゝ　ゐねるゝすゝ
のゝろゝ　一年をびれゝ　おゝかびれゝ
也一説大やうゝ心也　一おれたゝもゝてゝこゝ
各留半座宗華臺待我間法同行人法照禪師會澄
一をゝびけゝすゝゝう　弄　澤進ゝ人の逐付ゝ也
一おゝを　おゝろゝ心也　まゝいゝ心
一おゝゝいゝ　ゝすゝ　ゝ也字二角早下ゝ也ふゝ
ハ位下の云遊云すゝ大饗ゝ人数のかれ夾を
ゝれゝんゝゝとゝいゝ　一おゝゝ太政大臣　内大臣轉右

政大臣例忠義云ゝ外多例多法拙ゝ要
一おびすゝ　次第ゝの心也　おびゝゝゝ心
一おれゝ　すゝゝゝ事也
一おゝたゝ　臆病也　不学ゝれば
一れゝゝけ向ゝ　ゝゝすゝ　條氏の院へゝけ
一おゝゝゝあゝ　孝經曰滿而不溢ゝれゝゝ
一おゝゝやけゝゝゝ　ゝゝ右の騎射ゝ也中ゝ不射
也六条院ゝハ相撲ゝ馬ゝのゝゝ的を射ゝ
一おゝゝゝゝゝゝゝ　源の後の名ハけゝゝ
内大臣とゝ丞を為ゝ人ゝ　ゝゝゝゝ也
一をゝゝゝゝ　大案二卷若得為人聾盲瘖啞誘斯

経故薩罪如是 法花

子游問孝子曰今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養不敬何以別乎 論語

一のたまやちゝはけう氏

一をうちあひ侍て風病敎や

一大原野の行幸 延長六年十二月廿日大原野行幸を模し

一われ〳〵もうら ほれ〳〵もうらや

一われほやけゞ侍てうら不

行れて手ゝ月心

多つ人まに私ゝうを立出ゝ行ゝそなたを用侍のゝこの

職ゝうにゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

一おもてをてぐすに巻れ　トダ帝ハ書事やおもくハらるぬ
うるさ面なれどさらハ戸まぢきたるれもあ心れ
一おほられぢうどく　切灯臺うてうどくさる
一女のくうてあんうこ紀人も　花　寛平遺誡よ太大将　時平
先年於女事ニ有二不快一　若上　一おほいまうちぎこ　内府ハた
改大臣なれバ　おほきおほいまうちぎこ　いまうちぎこ　おほいまう
ちぎみうあるとなる　冬ハ　れも日事といくり
一れそのつをナニうそ　文冬のれうそ　花　例ハ引のくう略
一をうこ紀のつをあうれ　河　置物机　唐羅　未濃霞
一れ　伝よつせあて十八年　十八年ノ年位　清和天皇の例や
花鳥弄紀ニ妻
一女ハ妻とあうれあとあうさ人の

女感陽氣春思男　男感陰氣秋思女　毛詩
一おほくのうをうをうを面ニすぐ　うつほのうをげうや
一をうをうてひうさうけ紀人の思うけハ紀ニたくへてののくう
一おうをうゆくそもうれれ　花　山哥ハうをうをうう哥や　いづ
うれ文字心伝やうをうをうぐ　後宇多院　紫式
一女の方いうれおうるづつうみうう　我も人もおうるづつうみうさ
もれい女ぢこや　女人為業障　但盤涅槃
一おうやのけううもやうれあうう　親の孝ハ尼をうううしや
くいうう　おれうう孝を作くしうまうう
一をううう物よ為文をうへ　帝の母　紀紀　紀
一おうほやけのううさ面もう　近衛大将や

一 大くさい 一度我よりあひもひしるべ、そぐくそてはあること、さは
世上うはいそぐらや
名姓のくさはのなくち
あくり 入毒余温藥 ぬ薪 盡火城 方便
一 大くさい はくさくすべくさは、摘と罪とあるこ
一 大ぐくさい 厝を幻ゐて 術まちくべ塗のり来とあるてこや
一 小忌ゐて 青糊十一月中代卯日新嘗會辰日豊明節會よハ
山あるてすれるどこと云物紙をすちち
一 れ佛名も 叡和 年十二月十九日始之 今ハ吉日撰のり
一 れはれれ 源の出とくべ又物の夏はのくまあくち 派よくる
へくにもあるべくくくしべくくく

一をこちぐべし　昔の大空は能者にてひろきゆゑの心也

一をいろきうきあて　ちゝ〜ちどもやぶひう〜く書めべし

一をれぐこと　抓て笑れ　ひゝ〜ぐこと　古家にやりて白文

へい接ぬべし　為いきすて〜めけどこのゞ幸也　ゆるゞ中えいさ

まゝめとや

一れうこと　琵琶也　琴

八絃の琴也

神功皇后紀北到大荒国松浦縣而進食於玉嶋里小河之

側供止礼世俗ことゝいく

一れいや　紙納〜ゝる心也

一れいぐこと　ゆそろ〜こと也

一れすゝ　をぞゝ〜ご用れ　うゝ〜ゆそろ〜さ心れ

一れけぐれ　ゆうゝ〜ゝのをにく〜きれゆれ

一れゝ〜けのゝるゝ〜ろ　たのゆゝ〜ゝ也

一れてうけ　芸人の術をゝ〜ゝ而よけれども字治よいゝ

上麗のれゝ〜ゝぐゝ〜ゝ而　ゝ〜ゝあゝ〜ゝぐあゝ也

一れぐゝ〜ぐき　ゆ中ゝ生長ゝ　ゆそゝ〜く男をゝ〜ぐんと思

ゝ〜也

一をゝ〜ゝ　迎ゝ

一をゝ〜ゝ也ゝ〜ん　伊勢物語よ　鬼一口よゝ〜ゝ　江談云小松

帝時仁和三年八月武徳殿の松原に鬼食人是則大盲也

一大ゝ〜ゝ　日本記　溟濛

一をゝ〜ゝぐべし　けゝ也ゝ　我ゝ〜ゝれゝ〜ゝ

一れゝ〜ゝれゝ〜ゝ　報言也

一女のすゝ〜ゝ　法華経云　又菩薩

摩訶薩不應於女人身取能生欲起想而為説法云ゝ若

為二安人一説法不二斷二齒炙一不二親享一況
復錄事

一れうれうの餅のすそのうぐ
一たはるこの出家いせ上のうぐ
れうれう餅や
ひちれどもとれ云紙〳〵をいとめそうぐれ心れ
一をの〳〵 紙納おくどいつるおちゞ
一たいく〳〵 老や
一をの地をろうろう老や
一をいこれいまして 色いとも云心れ色や
一をの〳〵 已ホや
一たうさろう川 奥中川・又奥岳川
名ホや
一たいくろび 生出や
一たはいき 大法 已姓や
一たまく 侍者・女を云成仏所
一をとちひ 者ろれや
一をちひれ とうれびれや

一たいさろく 紙納や
一れ はんとうむ れとうむ所
あろうぬれとうむ所ろ所のさ〳〵ろうてうむぐされ
一たはんべ 贊へや 古今ゆべとうこ 大常舎ろや 仏もまろう心
一たひれ 老枯 紙角よの関係の〳〵色と花れれぐう
一たはをうろ ろけうや 一大法〳〵う 大法ろう心
一をうろう 百ふ反 一たはろけるぐ 不ふ孤

わ

一わうろく 河 無別 日本記 無破
一わうぐれ ろう底トや
一わぐ〳〵く 外愛れ
一われれ〳〵う れう我〳〵いあ〳〵わうく色ぐろ心や
一わぐん 侍埒 諾 侍埒 冊考
一わざ 変や

のれ時、今作出絃と云う。偖紫鶯の家に至りて、あつさ
琴、あつまごくもいつもや。暫もわ記云、和琴ハ元ハ弓六り
弦と引並て開けると、後より琴と俗ならやや
一わらうあると 哥ハ早下や 一わらいハやミ 痲病 病日て
世俗よりをうるとこいくるうられること
一わんとうと 王家ハ等倫手孫にて、姓と不賜平人也
一わ方へいるとう 今ハ婦まいらう河、体臭すう房ゆや
一わさ氏い 幼者敗 不蔵 老者躰 温悲端 冬寒氣
侍入 皐中 辛ごうとうてのめくう
一われのれくうなう 山陳式河海 荒島 書 暫て 御門 苦
ま入くう 根をうつて、放主の額ようくうて、弟ハ方ようと

ひとうたちく、作すあるとと云う
一わくくぶ陰くうのべて
て、涼と 素食といくれてハ氏ハやや、若 蠻居 ちう人の、ゆ人出あ
ちくとバうとのまとこやだのれくく致仕の表なうて隠
岳のうとちぶくうくうと父あるくとうれんあれ
まとはぐうや 一わぶくくに まぶ海ハ海乃
却名や、若る 一本ハハこうくうれとあうちう人うれハ和と
ちづむ心や、蛭 みの足 うあハこうこうこと云心をうあると
一わくくうまうくうむうれ心ちはるあ海とハうめうさ
哥 哥合 一われくくうとくくをを
弟くとむこうたちとのあて、別の指を指たやうれくくそ

つけて、ねやちかくけさ中よりおもひさけ也

一わらうてちかくよ　一こと、ハ、京へとゆむさのみちとのゆん

しきやくてゆハつをぞるしきハ、それ也云ちかとし

ちかれごとそれ心や　一わらハあとよ御のうざしろぐい

ぐれのあるあ　名あとるれうちハ御のうさ、紅梅うされのあ

うあとうちうや

やと、紫ゆあくうしうちなや　一わらくハ書ゆよ手　書ゆハうち

代の時、菅家をたゆ遷をうしくうまちぐ紙ゆうて、れ　こうあ

一わらくハけて　名童乳や、おうちげちうされ心

一王女れうて　王女れし、王孫をゆや、年崔院皇女昌子内親

王令泉院女れ世ゆ稱王女れ　ゆうれ王女れうくぐしず姓とも

一昔ハうれけや、故女れちぐうを　一わうれすいちうのとてちうくわま

ひうちくき　有五家髓髓、又濱成或ハ、奉二七病喜撰式ゆ

一ハ出四病孫姫髓　有八病　是等や

一わうちうちわうて　うけわうるうて、内裏家うちうち、関侍

花人ホ、東階の上ゆて　拘むくて、手須竹　孫童竹　下略

尚叶勅給ちれバ、不詳　これハ六条院そのうや綿ちぐわる

うれ用ゆ　ゆべし、れゆうとつて重や、袋拘すくて、十

百千万とうくて、袋ゆて　紙略と云奇とうくて

まうちうと　一わうかく　ゆの髪や

一わうちやうとうく　皇慶平潤や

一わうてゆうくうう　四月天乳和且清緑槐陰合泄堤平　白氏文集

一つらくにくるやるる心ちち和の子や

哥者の〳〵ハ

一つやそれ 哥の多こうさハゆくちの心や哥ハ多あとハ大文のすれ

若こ

一つれまのち結 賀の南日ゑ日や和倒多〳〵源氏のれ賀を和

葉まて伝結や十二行若葉 七行若葉 河海

哥

一つ巣子 まそれ君れと〳〵源と親ててそこら結ひ一ゆる

れば〳〵ゆうぶ松れるよゆうこつれまれこれ心や

一つふれあつまれ 羹 一つうりてて 王乗付や 手

一親世のか 二子室かの心や

孫のれ様神ハあれどや

哥

一われのこや 我と知こ〳〵 作てけゆうハ多ぐられまで

ふこんとやめれこふ 袖ハ拍とみとれすうこ〳〵し

哥

一わけゆん ふこんこまれ 多こうけまてめれこね

をけんこやこうる

とあまこあてだ〳〵このあ〳〵一つるとこあてこれこ一ほよや後

撰拾下哥詞出るもこ〳〵こ

竹門

一つ心ものあ 菖〳〵嫡女をく 牧伯源をひ〳〵れ遠とこや

一つるこれ 綿こて 孫と作てこ〳〵ゆ明ゆ

一つここれ こ〳〵こ 嫁娶こてハこ〳〵てこれ心や

哥

一つこまれ 寝と根こねこや

独忘憂

一つこまといふ ハ あつこ琴を糸一〳〵せこ 我妻と

ゆへこ

一われひぐん 唯識論曰

云何 無慙不顧自法輕拒 不善為性 能障礙 悪生長悪一

行為業河毎慚法師或懺悔

一われくて　月の中にあるべき事と可心得

一わるべ　多生や　一わけもなう　無慚無愧

一わるもの　虚偽うつやや

か

一文衣　四位　給女の恐あるや　門の脇をめしあるべ時あれ

ひのふ人ちるようにて文衣とつもちる

一かんぶちめ　公卿や　たゝたにたゞれゆくよとをちる月卿

といつも公卿や

一かつて　寵をする心や　寵

の字や　又冊

一かつられゝば　可畏

く神　日本記　恐心やれゝば　穢

一冊

一かくちとて　いつもとゝ　ちとハ生れ　命をいつくるとと

の心や

一かくちゝ　禁中にて

文衣のくもくもちるんと　けんちんや

一わるゝ　けるさ　くれとて　用心やをくれある心や

一かくて　恨

一かゝ　くてつけゝ　あるに　頑

心や　誰　うゝ　心や　サ事　いくるる心や

一わるゝみ　河　記念　極位　信　文集

一かくくくくやと　文衣のくゝ　大くゝ人に　送ちくれど　ども

又のもとて　ゝ　ちるもをつち

一かんゝ　金叡　一わるくくくゝ　乱情

一かんく　勧やうぐ日・えんくとあるもうくべし

一かくやくひのこと　一条院の御時・東門院の御入内あって・若

壺こまーまずとくーとるち・業平物語にも・当代のものも

ちゝゝ物語こまし

一かくさのみ待　ゆくあれども・

作物語ようこのみねるこゝあるもそれ人くざわるもそこの

さ・光源氏ところのみ待と同時代こはあれども・此・或

色あるもてけりや・家まぢ此一巻の序や

一かくこと　頑

一かくづくしけちふ心や

一かくかくる　上の上ところるもの

一かくれど　うあれどや

一かくやうくくはたづの心や・ちくやうぬ

一かくるもこにしあーぢ　一うどあるや

一かくれうこと　あーるーあ声

一からうして　幸や

一かれうこと　あーるーあ声

一かうらん　棡干や　おぢ海

ちもいくと

一かすあ　世界の海首元嘆さくく

一かすあ　世界の海首元嘆さくく

まーるあらへること・中門のこちら海ちひのあとや　此迷奇と

くきこて・作るこ・それ系ある・義法・信法・海国の壊るこ・啓示

や・その森の・ち・ちくうれば・筆・本・そこ・ぶやう

まて・近くこれば・それる　此ハ本ある　新

けこてあこあるこ・筆・本ハ人九の言　始九

金集

物ゆこあくこつけ　きぢ此ちこ紙ちこ人ぢ紙

一かいまの　坂ち見　物ごとに　ものこと云や
一かけも　見や　くと云事ども　あるべし
一かどいまとみのやうなる　今も門をあげわうすの小家
のさまなり　一かさ紙をきぬどうして
中門のうぎぬぐし　一かるかやとぐろ　屏帆
真帆といふはちうでうやうさあしさうや
一かづらさ氏神　大江とさしてうさぎ氏神と云や　山神橋
とうけのふゆくるる　一かべのうれさうしく　花
毛詩七月篇云　八月在宇　九月在戸　十月蟋蟀入我
床下
一かれ　碓　老人　まうれよまうれうれ

一神事　九月八朝日　門叢の神ぐるや　三十ケ日を
織ふれ　ふれ　ようと　家内　叫　もぐさや
一かうとあくる　うちけうう　ちどいふる　それよりて
といふや　文くわをけう紙　うちけうちどいふるみぐし
一かうぐ　かはいまと云教の　滝　尼の力や
一海　説　の伝　説　の書　ちれば　佑　といふん　勿論や　昔
大音王　といふ王　うあうけうさ　ちけれを
図の王四人　ともうれを　えんをのぞけ　祝　このの
如　ようを　ちの王　ちどうひ　ちどうひ　ちのいの
うあうて　世七万八千九百星を　て　ようぐうい
あるその　詩　ようれとうて　大海のうこをけうこと

とぞ。文の玉ちらしのよ。竜宮の四人の王さま。彩むりひて
ちらしてしらすまを。吉祥天女の牛線より作り。又寂蝎
所龍主の八歳の女の無し王の妻なれば。后といさんす
相遠ちらし作り

一かしれうつくしくそれうる
昔八尾と云ふ。髪をいそしでうるのとうるとうむどりつち
一かはいあくてうるて　るさきのて。はのあくぬうる
一かんざし　おさるれはうんざしをしねどうこあけ
たうこうけてうるとといふうる

一やうるるのうて
大徳のかれるどして。さるし
ちさい世の天も心いうさ所無びて来うられ心
一かのちぐうるんぐる　前よ尾光り。海氏のかるをびせる

の。ちうと。海松のうちのひしうる氏云
一かのちうまを　源の小巣ようそ。まのみ尾光れうるをいそ
ちうのくうと。尾光のうちうんしあ
一かの色のひるうん　紫の出無のうる
一かうやう　うやうと云心や
ちうのへとや。ぐるへふうぐと云心や
一十月　うるうづうとも
ちうとも退おの時。うちうの海おはつるいづうそも裏
第代あるうの結元
くといふようて。ねつうそて。うるうそうんうとうとあうどりむる
はとうどうて地いうるをいうや。ねつうそ地いうるうとも。

八講ちどの論義の時、御堂者、ねどいへど、威儀師、馨を
打ちて、そ後は論義をやむるや、そ心ゝもゝ通ずるなり
一かゝるもひとゝ　ちゝ　ゝ　ゝ　

一かさあとをどり 調子とをくらうを面をいてり

一かしらの蝙蝠をして扇と作和けるや 掌の扇や 仍夜扇

の異名や 拾箱 あり

一がくきりあとをん 定家やはうしきう 親行なり

文元をどりのいをんをれ 面 焼行を 卿や 鄂別のおのう

ちは 来天の字をすをゝ 又 文忘し 卓文君 白頭吟と云

平というてあれば 月 る 相如 れをして 義をけるや

一かくれをさ 拍をうすさ心をは 浅さ心をや

一かくちをいさをにをそず 花 嶽高 れ拍をうをて 舞

ふ 仏天 暦三年三月十日 二条院 宴 陽院 月

十二日 円喜 仁寿殿 宴 各 有舞 糸 昂 養 春 鶯囀 又

地下 伶人 をうして 奏 上の舞 をうをや 成 拍 仏の をうを 面

乳 もあれも あるをも あるをうをうをうをうをうをうをや

一かうじもをうをうをやうを 侍 師や 秀逸 をうを 毎 月 感

じてをうをず 通 しの をうををうをうれ

一かうをうをべをさをぐうを 花 つぶれ心をうを 金 物 をや

一かぐをし をうをうをあるををををうをハ下仕 まで をうをるをうをぐを

八上 爾 のをうをや 汗 被 衣上 を 色 すう 地 をうを

一かうけ 豪 家や をうをんをんがうをすをとふ心をや

一かうのをぐいをぐんをうを 奏 上 のをうを をぐれをする事

 この 夕 弟上 の 雑 袋や 拾 物 をも 拾 をうをす をうをとれを

いをぐんをとうをい 一 貞 をも 名 付 をや 近 衛 の 拾 盗 将 曹 府 生 を

一人つゝ召しつれて二人をいつせ、職
をもて隨身とする所ハ、ぐゝ召あつて、出仕のゝ
るゝ事ぐすると、をかゝはるゝものて、一人げゝわる
ゝ所ハ、ゝれ隨身とつゝ也、俗令納言殿ハ侍
所の長二人を常ゝ人すゝて六人の隨身をゆるされ
てゝ、ぐすゝるゝそのゝ人ゝ蜂蜜ゝぐれ、ゝ盛ゝ曹
所生ゝ又一人づゝ奥すゝ代、一貫ゝもゝゝれ隨身ゝゝ云也
いづれもゝれ地下のゝもゝ、ゝ也、諸人のゝゝ、ゝ上の
人のゝ盛をゝゝゝれを一貫ゝゝゝゝゝゝゝ也、
又行幸のゝゝゝゝゝ常曹ハ、陣ゝ代生ゝゝゝて、
ゝゝゝゝ一貫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ也、一

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一あり・幄の宮にて中ノ原に庭をなさるるかや

一かけまくもかしこき北野の社 宣命の社 掛畏

一かけまくもかしこき八幡宮 御社殿 孫王・そもそもこれ

孫主為法院 例真言内親王 文徳孫王中務卿 仁和五年 トヨ 孫王

例世一変の例 ヨツテ 一変の例 ヨツテ 例 ヨツテ 例 ヨツテ

云、大納言二人、さう、今の文のもとにちかく、三人のかいうどとう
かたれい侍のまとくらつべきやと、寛平遣戒の心也、三人乃うち
上侍官あるべきなり、さうまわう宮のかとべいうまと侍乃字
とをあべきにして、源氏も侍大納言というれの中也、中院の一
人侍十人さうわうと
一かくる波よりけて 道の人びと
一かくる人十づつ 十列とい東遊の舞人十人ちよりかくて、あをと
さこと地とをして、神社の行幸、関白の賀茂春日行など
石奥して、社頭にて、来ちと舞、馬場にて、馬を
もすうるうきにて、右近の官人、をけどむ、八幡原時
祭ちどとい、雲客舞人、源氏の元服告まうでる
もう人十列と奥しめくるちべし

かりにて、はしりて、はしりて、はしりて、はしりて、
堂舞 干時 辞 長徳二年八月九日、仲
日、勅賜 右大将 同日、童六人、為随身、三年十月九
みこと、今来日、侍乃、為侍各三人、為侍乃、侍従、侍童
すうう、みしられど、それ、装束の及、面見ち、水干うべし
やうう、あうべし、侍乃、うへど、うやなくいとをうべうう
やいづれもうう、祝授とこ侍、れ堂舞六人どこうう、
れ、十人どあう 又 蟲云、童侍乃、侍、国史ちどもも
侍ぶ、それどもめしる、侍ちもうべし、侍乃、書、所
祝授するべし 一説云、
顔姑射刀自、萩 顔姑射山、いづれも古物紀也
一かうもうう、のうど、唐守

一かさつんうるく　うつんう方ゐるも　此時ゐ明石は寒の冬も
一かんやぐらにりしれうは紙でいして　弾じいして　強うも　紙屋の人
初て　色紙すき　出とてうも　これさハ唐綺やうれうす抽も
一かうるいうぐうるうて　紙とつぐて　ちうれハうゐのやううる
ゐうけうぐうて　青ハ絵　ゐ色ゐ　ゐ　この伯ゐ中納言
もと　心とうるず　ひれせうは　ふぶ　ゐ　ゐうさ紙　ゐとうるのふゐ
れいぐうる　ゐいうる　ゐ後の　ゐ　ゐと　ゐ　指遣　九伯云　慈義云　紙ゐ
一ゐと馬ひけう　ゐうる　一かぐうるう　俗ようくぐ云ん
うゐうも　四疊ちう　一かうるうようるうるうゐうを
野　曉紙堂　て　絵　ゐ　ゐやうるうるうぐの　絵ゐも　又　往院　浪花
ゐするうしとゐやうも　一かうれゐぞ　浪花　ゐうれゐ　ゐ

一と今云也　安信　ゐ　ゐ
元毒云
のさハ　ゐいて　源氏の　一門も　般昌　ゐんけとも
一神さび　こけう　年月のうう　源の　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
神宮　正久　ゐうぐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
れ絵　桃園　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
一かうるうて　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
一かうるうの下風　祭の奥　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
一かけるやハ　うけるやうとハ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐうて　除服　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
一風のちうけうるうすうう　文選　豪士賦序　落葉　俟　微風

一陸奥風力蓋寡風の力ハ門大尺盃中凡撰やねハ不成とも
今ハ多くとても源氏のちゝつゝさと云心なるべし　かくさん
る不可成さるも　一風の義ハ行ハ風生竹和窓
間昨月迎和時臺上行朗　一かけていへばうけていへば
くれいや　蘿のゝづゝ紙ハうけとうけ　ハうけれいとをぎ
ゝて　辛也　神ゝとけゝ　ゝハ深ゝ　ゝ紙ゝ
一かいゝちゝゝゝゝゝ　河　搔練いゝ紙のうゝさゝ也　ゝハ
のゝゝゝゝ着て　云べゝ紙略ゝ　搔練いうゝさ紙乃
ゝのゝちゝゝと云　お中びゝゝとハ神を云ゝ　絡ゝ
ゝていうゝ　ゝゝゝゝ　着ゝゝべゝ
一かへゝ　賽
一かけゝうゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ　唐東京錦　日ゝゝゝ唐の孫ゝゝ　今業
鳥地獄　東京獄と云ゝゝ　一かゝれのゝちゝゝ呼ゝ
ゝハ行ゝゝゝゝ　ゝ拍ゝゝゝ　ゝ着ゝゝ
ゝゝゝゝゝ　一かゝゝ　舞の神ゝ　神
一かゝゝ　ゝゝゝ　今業　高中ゝ　疑ゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝ　義人ゝ　六位舞
人のゝち　ゝ着ゝ　ゝ拍ゝ　ゝ
ゝゝゝゝ　ゝゝゝ　ゝゝゝ
一風ゝ　ゝ波の　ゝ人　晴嶺日記云　石山ゝ　ゝ
山ゝの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
近ゝの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
一かゝゝの山も　不見蓬莱

不敢童男童女舟中老文集

一かつてうこうつよ　喜春亭呂や及音は呂より律ようつを云也

喜春亭は黄鐘調の亭や平調ともつて用うつや二越俗黄

鐘調も律や呼うくうこ忘律の呂ようつや呂律次第

一かうこうかうこめくう　どうこうこうはめ神や

一かくくやく　大月ようつや　一風の吉秋ようつと　秋風亭

の心や平調九次第盤渉ようつ

一かどこうこう　うこじ猫は花の名ようは紀そ球文整ようつ菊古今

よりよは猫ようつこれうつ　一かうこ紀いそ猫もあもうつ　日

本紀第一云天照大神踏堅庭而陪殿若涙雪は鹽散　今案

うこ紀若は雪ようつこうつや　そこれこれこれ悪行を天照大神

のつうつるは　はすうこのはざうこうこ落ていきるひきうこ落れる也今

を紀を弁小將　ようこいうれがようこのうこうこうこうこへいる菊

ちうこう俗　一かけくうこう　恵や　一かんの天　関侍督ようつ落す

寅は初て三西夜寒のうこ吹べし　一かうこうや　雅俗也　元結心

一かずうこうこのや　九月せば世俗は落元十月こは四まいう

ようこめこれこれば九月ようつ　命をうこうと云こう

まれこうこう

一かの流いうこざうこうこ　家物は嫁合は男安氏川を引こう

と云流ようとやうこうこけこう　元くこはこねだい密通の西や

一かうこのやうこて　文文と云歌也　一かうれこの　暗みかうこうこ色

不吉相通や　一かこう　菊楽夜の菫や基は極

菊秋は菊俗冬は玄岩　一かすこぶる月と雲　月雲と霜

へぐてどい・島もあるんと攻べし・よこ笹を感じていつち

一かんなのこ 假名を本・何時始起て行人不知・夜のうくく 見往古和河

八方紫・日本記の哥孔雀や

一かうこうても 美の名いあつひをえ 打猛い夕当れり・文章生

こそあつうをいくち・抗・猛・猛・一枝嵐山・所玉・今い課試及第こ

変化・来・紫風こうこの紫の風や・博士ようこうこうや

一神亡月孔世日あまつ孔ほどこに・六条院に行幸こ 庫保二年

十月世三日・村上天皇行幸・来雀院に行幸こ

一かを 反 哥 有 歌 来雀院よこ・漢武帝ノ・有凍歌よかるどら

こや・東宮孔すや

一かうこうのぶいつち・ぶそて・

歌ようすや

一かうこうち 時 沼ようくち

一笑皇恩 何 延喜六年月十六年孔賀孔る・笑皇恩万歳示こ

ち・出孔ようこうち

一かうこうこうこうこ

一かちち 歩ち也・中将廿将・ぶ孔ぶち・ぶ孔ぶち云心也

一かけ池とも 陽夏の行物也 一かる石清水・時の祭 橋政開

白社・宋の時のすや

一かるぬそて こぬそて云

歌の名也・ぶち・ぶち・孔云 一かんぶぶ 神寶也

一かうこうこうこうね 美の宋一口ちち

一かうこうこうこうこ

一かんれこんのこうもい　唐織物のかたぎや

一かうもうれもの　海況や　一かんこうち　吉日なり

一かすれれの　合歓として春日なり　伊勢なり　いせ春日なり　君臣の

御ゑや　中ごろい　必有氏なり　秋好の中宮　紅葉・古歌仕の宵　ゆかしきあひ

一かうぶえ　うそ笛や　一かるかやめぐり　あやしふし心

一かるうい　暗舞れ　寄せい　切者れ　ずる　一かるれげよりづるいあるず

ゑるるるいあるる　祈や　一かるれげよりづるれあるる

為人が将院　そい別　ゑ　ゑ　いるれげよりづるれあるる

ゑゑ　ゑ　ひげ　ゑの姫　ゑの麓中　ゑゑ　ゑ　ゆゑ

一うひめ　かんるゑう　ゑこうん　ゑれ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一かんするる　酢醤　ゑい　ゑ　ゑ　舟　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

記應和元年閏三月十一日夜宴舟ノ糸　蓼酢醤糸　舞人四人云々

文河水糸ど云流る

るるへのるるあるるで　ゑの沢よめひとひめひとるるべ

一かせうどて　風心うどの四や　一かつるひげ　鬚鬚　おもづるひげや

一かぐるや　去年　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一かるるぐあるる　除服や　一かぐの中れるるぐ　壁のる

ゑるれるるるや云や　遣壁暗養　無限思　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一かいせんらく　海青糸　水色　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一かさくもり　芝明日　日蔭のるるのるや

日うげもうけめどや　一かうるる　勘当や

一かるの町　二れ町　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一かやぐ　うるるるる　心

一かすが島　姉妹の仏ろかるかと
ものいひて物を変ずる心ぞ　一かうぎんをて　庚申

一かるくうちるぞうん　中ぞも地ちひ、ようさ舟もやちがぞんと
やうくいさうぐいや　一かるおとりは　おとり服のうも

世のるくひとや　一かけうろ　れやをろう咒

一かのうぐーこう紙　若を人罪是　葉は芽なるは不純　仏元濁若
者是人　現世呂中　芋生　蓮花　光　毛孔中出　牛乳　梅檀香

法華経

一かまれさう　降魔相　不動尊
念怒のおやあるりうる心りや　一かくさ舟　鵲や　家りて　鶯と
らしうち　一かきくく　天雲　母雲　何りて
もはなてくさぞれ心元　一かとは紀ちりいう　出雲寺

垢をこうせうる位髪元
めぞいくり髪の毛あくばれば法ーれ
一弁ちど　弁かる心縁ちむちるべー　一かくうぐ　ぞれ
一かざりそと　一生男ぞ　一風のまざれ　地獄のかのはを
風のまざれとこ　一かくさう　学生や　一おれを　不離や
一かうど　大やけれ　都くり
一かせこうげふ出ほまつきあげりべよ
壁石伐木　梢殺林莽

文選　宋玉風賦曰